
† 正義の崩壊者 †

堕倉 夜罪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

†正義の崩壊者†

【Nコード】

N2566V

【作者名】

堕倉 夜罪

【あらすじ】

ある日自室で原因不明の大爆発が起こり、俺は死んだ筈だった。

しかし瞼を閉じ、次に目を開くとそこには神と名乗る仮面の男が居た。

男は言った。

「貴様を今から力を与え、転生させる。転生先の悪を葬り続けてもらうがな」

そして色々訳あって幻想郷に居着くことになった。

どうも、作者です。

先に言っておきますがこの小説は色んな理や設定をこれでもかって具合にぶち壊します。たぶん…

苦手な人は見ない方がいいです。

【小説家になろう】では初投稿となります。

何分ボキヤ貧作者の気まぐれとノリで構成されているため誤字脱字がパナいかもです。

コメ等も荒らしでないなら大歓迎です!!

最初の転生は幻想郷

「ククク……遂に来たぞ！！幻想郷！！取りあえずミステリアだ！！どこだミステリア！！」

遙か彼方の地、幻想郷。

夏でも無いのに大量の向日葵が咲き誇る向日葵畑のド真ん中にバカの姿が……そこにはあった。

てか俺ですね、バカです。

「俺の名前は鬼澤^{おにざわ} 颯^{はやて}！歳は17で身長は173、体重64キロ、特徴は特徴が無いこと！！強いて言うならネット充かなwww」

「人の敷地内で何やってんのよ？」

.....。

おっと、死亡フラグがやって来やがったよコンチクショウ。

現在、俺の目の前でキレてらっしゃる御方は風見幽香その人だった。いきなり幻想郷の話をするのも何だ、俺が転生する前の事を話そう。

時は遡り、俺が転生する少し前。

いつも通り部屋で掲示板を巡回していた時の事、急に目も眩む程の強烈な光を放つ球体が部屋の宙に出現した。

「な、なんだこれ!？」

そしてそれは徐々に膨張し……強大な大爆発を引き起こした。まあ当然と言っか…

目の前で爆発したもんだから痛みを感じる前に即死ですね……

リア充じゃないのに……

そして気付くとおかしな事に五体の感覚がある。

重たい瞼を開くと、真つ白な部屋に俺と、仮面を付け、赤いフード付きのマントに身を包んだ人がポツンと居た。

「目が覚めたか。よく聞け脆弱なる人間。今からお前を転生させる」

いきなり何言ってるんだコイツ。それと声からして男らしい。

「あんた誰よ？」

取りあえず一番の疑問はそれ。

「我か？人間の語で言つと神に当たる存在だ」

紙？髪？なんつた？

「神だ。そんなことより——」

「オウドラバタイ!!」

「ゲームは解るか？」

スルーツか、なかなかのスキルをお持ちの神様でWWW

「ゲームって何の？」

「携帯ゲームやテレビゲームの事を言っている」

「知ってるも何もやりまくりまくりですよ」

「なら話は早い、お前を転生させる先はゲームの世界になるからな」

アールグレイネタもスルーかよ……てか二次元入りk t k r

「何のゲームよ？」

「それは好きなのを貴様が選べ。一番最初に決めるのは拠点となる世界だ、慎重に……」

「なら迷うことなく東方だ!!」

「ふむ、それはいいが一息に東方と言ってもどの作品だ？」

「は？それってつまり東方紅魔郷を選択したら地霊殿とか妖怪の山とか行けなくなるわけ？」

「それが嫌か？」

「当たり前だろ？」

「ならば条件付きでその願いに応えよう」

「条件？」

「そう……東方紅魔郷の異変解決を巫女の代わりにやり遂げる……それができたら共有化してやろう。もっとも紅魔館以外の場は最初から移動可能だが」

「初っ端から紅魔郷かよ……えげつない」

「勿論貴様には力をやる。コイツを受け取れ」

そう言って神は何かを投げて寄越した。

反射的にそれを受け取り、よく見れば俺の携帯だった。

「なめてんのか？たかが携帯一個で紅魔組に勝てるっても？」

「焦るな、そのデバイスは色々改造してある」

神の説明によるとこうだ。

＋半永久駆動

バッテリーの改良により、充電をしなくても動く。

＋圏外無視

圏外なにそれおいしいのらしい。

＋弾幕切り取り機能

まんま文花帖。決定ボタンを100回押せば一枚撮れる。

＋弾幕生成機能

切り取った写メを消費することでその弾幕を好きな方向へ放てる。

＋破壊耐性最大

どんな手段を使っても破壊出来ないらしい。

あと耐水加工もされてるらしい。

＋全料金無償化

イヤッハウネットし放題

＋武器の召喚

詳細を入力して起動するとその武器が召喚できるらしい

＋瞬間移動機能

場所を入力して起動するとその世界にあればその場所へ送還される。

等々、なんかチート紛いのとどうでも良さそうなのが混ざってるが気にしない。

「随時アプリを追加してやる。必要無いと判断したものは勝手に削除するが」

「いまいち実感わかないけどまあいいか……」

俺の携帯に勝手なことしゃがって。

「では、転生の儀を始める」

そこで俺の意識は途絶え、現在に至る。

「出て行くならあと10秒以内ね……10、9、8、7、6、5……」

一目散に逃げたよ。

逃げなきゃ死ぬしね。

俺は向日葵畑から離れ、早速携帯を開いた。

「ええ」と……目的地紅魔館の地下」

早速フラグ建てますおwww

一瞬にして俺は恐らくだが紅魔館地下に来ていた。

「薄気味悪いな」

移動先は嚴重に施錠された扉の前。当然この先に最終鬼畜妹が……

「誰？」

「待ってる、今出してやる」

携帯のアプリの内の1つ、武具生成機能を起動し、こう入力した。

分類、籠手

強度、壊れない

能力、衝撃による反動ゼロ

触れたものに分解効果

装備時想い描いただけで弾幕を放てる

装備時空中浮遊が可能になる

やっぱりチート使わないとどうやらこの扉は傷1つ付かないよう
ww

入力を終わると両手に自動的に籠手が装着された。

見た目は黒を基調としたなんかの甲殻っぽいのが付いており、重み
はたぶん片方2キロ弱程度。

特に変わった所は見られない。

「どれどれ」

扉に触れる。するとみるみるうちに扉と門カンヌキがサビ、崩れ落ちた。

「一応分解の範囲は制御できるんだな」

「な…一体どうやってその扉を…パチュリーの能力無力化の魔法が掛かってるのに…」

「チートにそんなもの関係無いZ E とりあえずこっちにおいで」

「あなた誰？」

「俺は鬼澤颯。レミリア・スカーレットが発生させてる紅い霧を消させに来た」

「紅い霧？それと私に何の関係があるの！？私はここから出ちゃ行けないの！！関わらないでよ！！」

「フツ…なら弾幕ごっこで俺が勝ったら着いてきて貰う、スペカの制限なしの3回被弾で負け」

「人間ごときが私に勝てルとも思っテるノ？」

「さあてね？」

「壊ス！！！！！！」

俺との距離を一直線に詰めるフラン。

「スぺルカード発動【禁忌】レーヴァテイン」

スぺカ宣言と同時に真っ黒な剣がフランの手に握られ、そのまま突進してきた。

最初からEXボス「フランドール戦」

ガシンッ！！

「何！？」

俺はフランの突進＋剣の追突を両手で防ぎ、レーヴァティンを分解した。

「次はこっちの番だぜ？」

俺はレーザーと星形の弾幕を同時にバラまく。

「弾幕はパワーだZE」

「スペルカード発動【禁忌】フォーオブアカインド」

俺の弾幕に掠りながらもフランは紅蓮のスペカを宣言した。

するとスペカ自体が燃え、フランの分身体を3体創り出した。

そして4人となったフランから次々に花火状の弾幕が展開される。
その大きさは大小様々で、正面から見ると避けれる気がしない。

「ククク……全部分解してやる」

迫り来る弾幕を両手で防ぎ、次いで分解する。

しかし弾幕は一向に減る気配が無い。

「よし、右手で決定連打だ」

どうにか左手だけで弾幕を分解しつつ、右手で携帯を取り出し、決定連打をする。

「100連打完了！！原作より遥かに時間掛かったけど」

標準に大量の弾幕を捉え、決定を長押しした。

すると携帯独特の写メ音が流れ、フ란の弾幕がほぼ全て一気に消失した。

「!!!？」

「それだけじゃないぜ？」

データフォルダに保存したフ란の弾幕を選択し、メニューから実体化を選択した。

画像が強制的に消去され、目の前にさっきまで俺を的にしていた弾幕が今度はフ란目掛けて出現した。

突然の事に反応が遅れ、本体が2度被弾、分身体は凄まじい勢いで弾幕に体を貫かれ消失した。

「クソ……スペルカード発動！！【禁忌】クランベリートラップ！」

余程頭に来ているか焦っているのだろう、原作とは似ても似つかない程の緻密な弾幕を展開してきた。

が、俺は弾幕が俺の体に到着する前に携帯にあることを入力していた。

＋瞬間転移

移動先

紅魔館地下のフランドール・スカーレットの真後ろ。

どうやらこんな当てずっぱうな文章でも移動できるらしい。

俺はフランドールの真後ろへ転移し、肩をつついた。

フランは反射的に振り向くと一瞬驚いた顔をする。

その隙に最弱の弾幕をフランの額に当てた。

「コノ野郎ッ!!」

「おっと、負けは負けだ、素直に従ってもらおうか」

「ウルサイ!! スペルカ——」

「分解対象、フランドールの狂気」

俺は一か八か、フランの頭の上に手を置き、分解を使用した。

「うっ——」

「おっと、危ない危ない」

籠手の能力の制御は、どうやら上手くいったようだ。

しかし狂気を分解って……かなり無茶だが鈴仙涙目だなwww

俺は体勢を崩して倒れそうになったフランの体を受け止めた。

「あ？」

急に体がふらふらしてきて、視界が紅に染まった。

「遅……かった……か……」

多分、フランに『破壊の眼』を使われてたんだろう……急速に視界が暗くなり……暗転——

複数同時対決【レミリア&パチュリー戦】

「——だ………しょうね」

「ですが——は？」

「問題無いわ——にしても——が——ね」

俺は周りから聞こえてくる会話で目を覚ました。

「つく——」

「どつやらお目覚めのようね」

「ちっ——レミリアか」

「あら？私の事を知ってるなんて……誰かの入れ知恵かしら？」

目を開くとまず赤い天井が目に入った。

次に横へ目をやると永遠に幼き月ことレミリア・スカーレットとその従者、十六夜咲夜の姿が確認できた。

「知ってるも何も緋想天じゃお世話になったからな」

「初対面よね？」

「一応。俺は鬼澤颯、あんたはレミリア、そっちが咲夜さんだろ？」

「なんで咲夜がさん付けで私が呼び捨てなのよ？」

「いや、咲夜さんはさん付けしないと。レミリアに限っては一時期様付けしてたけど……言うから止めた」

「う……そんな事言った覚えは無いけど……そんな事はどうでもいいわ、この際あえてどうやって地下に侵入しあの扉を破壊したのかは聞かないから一つ質問に答えて」

「内容によるが……」

「あの子に何をしたの？情緒不安定だったのに今は凄く落ち着いてる。それどころか何故か貴方の事を気にかけてる状態」

「細かく説明すると長いから多少はしよるけどって——俺の籠手は？」

「どつぞ」

妖精のメイドが俺の籠手を運んできた。

「サンキュ、この籠手の能力…幻想郷風に言うと『念じた物事を分解する程度の能力』でフランの狂気を分解した」

「物に能力が宿るなんて聞いたこと無いけど……それより感情の類まで分解出来るなんて……」

「それだけじゃない、こいつは俺の意思以外で壊れることもないし

例えばの話だがレミリアのデーモンロードを真っ正面から受け止めても体勢一つ崩さない」

「へへえ。大方分かったわ」

それだけ言つとレミリアは部屋を出ようとする。

「それだけでいいのか？」

「話す気があるなら先に傷を癒しなさい」

そしてレミリアが部屋を出ると咲夜さんが話しかけてきた。

「此度は本当に有り難う御座いました。妹様がなんだか鎖から解放されたように元気なんです」

「タメ口で構わないよ。フランは何処に？」

「妹様なら地下に居ます。それと扉は普通の物に取り替えました」

そこで今更ながら扉を壊したことに気付いた。

「ほんとにすいません！！勢いとは言え扉壊しちゃって…」

「気にしないで下さい」

咲夜さんはニコツと微笑むと一瞬で姿を消した。

「俺は泊まってるのか？」

その独り言を聞くものはおらず、夜は更けていった。

——翌朝。

多分朝5時ぐらい、空腹で目を覚ました。

「昨日から何も食ってないから腹減ったな」

体調が昨日に比べ、軽くなってるのを確認し、籠手を嵌める。

そして空中をふらふら飛びながら部屋を出、廊下を進んだ。

「お、さっきゅん発見」

廊下の先で窓を拭いている咲夜さんを見つけた。

「随分早いつすね」

「朝食等の準備が有りますので」

「手伝おうか？」

「怪我してるんですから無理しないで下さい」

「鏡がないからわからないんだが俺の怪我って何なんだ？」

「額に包帯が巻いてあるのがわかりませんか？」

予想ですが妹様の能力によって額を抉られたんでしょう」

「成る程、納得した」

「朝ご飯とかどうします？」

「泊めて貰つという難だけど風呂に入って良いかな？流石に昨日から入ってないと臭いし」

「そうですね、ちょうどこの真上あたりに浴場が有ります」

「ありがとうございます」

咲夜さんと別れ、階段を探して館内をうろろしていたら当然が如く迷った。

「予想通り杉ワロタ」

俺は数分間迷い、ようやく階段を見つけて浴場へと向かった。

脱衣場で昨日から着っぱなしの服を脱ぎ、腰にタオルを巻いて、浴場に入った。

カラカラカラ

「……………」。

「。」

フラグは回収したよ

(。ω。)

(・|・)

カラカラカラゝガタン!!

「ふう。良い絵だった」

「いいやああああ!!!!!!」

突如、後ろから悲鳴が上がり全身から嫌な汗が出てきた。余計臭い。

いやほら温泉とかの定番じゃん?入ったら裸の女の子がポツーンと一人居る現象。湯気で(ズッキューン)とか(見せられないよ!!)とかは隠れるけど。

まあ要は何が言いたいかってーと、浴場のスライドドア開けたらすっぽんぽんの小悪魔が居ましたとき。

数分後。

悲鳴に駆けつけた咲夜さんと着替え終わった小悪魔の前で土下座している少年の姿が…そこにはあった。

はい、私です。

「不慮の事故です。すみませんごめんなさいピンポイントは湯気で見えなかったから大じよぶほあ」

「—————っ／／／／」

赤面しながら俺の頭をげしげしと踏みつける小悪魔。正直痛くも痒くもない。

「本当にすみませんでした。まさか中に小悪魔様が居るとは微塵も
思いませんでしたはい言い訳ですすみません」

「小悪魔だったから良かったけどお嬢様だったら死んでいましたよ
？」

「よ、よくななんかがああありません！！」

「落ち着きなさい。悪魔の端くれでもあなたは悪魔。たかが人間に
裸を見られた程度で騒がないの」

「あゝ長くなりそうなら先に風呂に入っていていいですかね？」

現在俺は腰にタオル一枚の格好。当然このままだと風邪を引く。

「こんな見苦しい格好のままだとうかと思うんで」

「「あつ」」

何故か二人して顔を赤くして目を逸らす。

「あの〜？」

「は、早く入ってきて下さい！！」

「そ、そうですよ！！」

これ以上ここに居るのは危険と判断し、俺は大浴場へ逃げ込むようにして入った。

それから更に数分後、脱衣場に戻ると、何故か俺の服が消え、変わりに執事服と紙切れが置いてあった。

「なにになに…『男の子用の服はそれしか無いから我慢して下さい』B Y 咲夜」

俺は仕方なく執事服に袖を通し、脱衣場を後にした。

「大変です、正面門が突破されました!!」

「直ぐに衛兵を。私も直ぐに向かうわ」

廊下に出た途端、咲夜さんと息を切らした妖精メイドが会話していた。

「わかりました、直ぐに衛兵を向かわせます!!」

「相手はたかが巫女一人!!お嬢様に何かあつては申し訳が立たない!!」

「待つて下さい咲夜さん」

俺は明らかに修羅場な雰囲気の話に割り込んだ。

「実はその巫女…俺の友達何です。ですから俺に任せて下さい」

こんな所まで来て霊夢と魔理沙に突破されてレミリアを倒されちゃ
適わない。

あ、咲夜さんも一応危険人物か。

俺は携帯を取り出し新たな武具を創ることにした。

分類 眼鏡

強度 壊れない

能力 装備時、自由に結界と魔法陣を操れる。

見た結界の種類と破壊方法が判る。

見聞きした魔法陣、魔法、呪文の種類と効果が瞬時に判る。

見た相手の戦闘力、弱点を把握できる。

度数 千里眼を取得できるレベル

スカウターに近いwww

てか度数大丈夫かwww

出てきたのは一見ただの黒縁眼鏡。それが俺の視界と重なったとき、瞬時に霊夢が居る場所を理解できた。

「桜涙目wwwんじゃ行つてきます。それと妖精メイドは退避させ
といて。巻き込んだら悪いし」

「しかし……」

「心配すんな。俺はフランに勝てたんだぜ？ たかが霊夢ひとり……
…大丈夫だ、問題無い」

やべwwwフラグ建ったwww

すぐさま籠手を装着し、妖精メイドと入れ違いながら正面玄関に向
かった。

「見つけたぜ」

正面玄関に到着すると、紅白色の巫女が一人居た。
どうやら奥へ進もうとしてるらしい。俺は2階から飛び降り行く手を遮った。

「誰よあんた？あの門番みたく邪魔する気？」

「悪いが吸血鬼は譲れないぜ？」

「てことは邪魔者ね。強行突破させてもらっわ」

「こいつが破れたらな」

「へ？」

俺は霊夢の目の前に多重防御結界を張り巡らせた。

「時間稼ぎにしかないが……いくら霊夢でも半日は掛かるだろうww」

「こんな複雑な結界を一瞬で……」

「安心しろ。後日ちゃんと吸血鬼を紹介するから。霊夢に先を越される訳には行かないんだ」

「あんた名前は？」

「すまんすまん。鬼澤颯だ、以後お見知り置きを博麗霊夢」

「私見ての通り巫女をやつてね、博麗神社に仕えてるんだけど……」

「だから後日ちゃんと連れて行ってく。それと出来れば霧雨魔理沙にも忠告しといてくれないか？」

「嫌よ、めんどくさ——」

「お賽銭入れるからさ」

「OK了解したわ。全力で止めるわ」

巫女単純www予想通りだがwww

「じゃ頼んだぜ」

「裏切ったら地獄の底まで追いかけるからそのつもりでね」

巫女怖っ！！！！

とりあえず俺は理由作りのために地下へ向かった。

「フランちゃん。居るか？」

「鬼澤颯？」

「そうそう。ちよいと失礼するよ」

俺は戸を開き、フランの部屋へ入った。

「フラン。ここから出たい？」

「本当は出たい……でもねえ様が私には危ない力が宿ってるから駄目だって……」

「なら……まずはそのふざけた幻想をぶち壊す！！つーわけで付いて来て俺の力になってくれない？」

「えっ？ええ！？」

フランちゃん絶賛混乱中。

「本当は出たいんだろ？安心しろ、昨日は酷いことしちゃったけどこれからは俺が守るから」

「ほんと？ほんとに出れる？」

「もちろん。フランにその気持ちがあればね」

「じゃあ約束してくれたら付いてく」

「いいよ？」

「フランと兄妹になつて？」

「ああ。その程度お安いごよ………つてええ！？」

「やった、これからはお兄ちゃんて呼ぶね？」

「」

しまったああああ!!

こんな所でフラグ建てちまったあ!!!!

どうすんのこれ!!

ねえ神様どうすればいいの!?

突如、携帯から着信音が流れ見るとメールだった。

『フラグ建てすぎたならハーレムでいいじゃないか。それが許される世界なのだからな』

んだとおおお!!!!

良いこと言ってくれんじゃねえかああ!!!!

「やっぱりダメ?」

「オールオツケー音」

フランと俺は部屋を出て、フランの案内の下広間へ向かった。

「レミリア、入るぜ」

「どうぞ?」

俺は分厚い櫺の木で出来た扉を押し開き、一步踏み込んだ。

そこに居たのは朝食を取ってるレミリアとパチュリーの姿があった。

二人は後ろのフランを見て目を丸くして驚いている。

「っ!?!これはどういう事?」

「一晩泊めて貰った恩を仇で返すように悪いが……フランを自由に

しろ」

「何故？アナタもその能力で額に傷を負ったのよ？普通ならフランを助けようなんて思わないんじゃない？」

「生憎、俺はもう普通じゃないんでね」

「和解よりも血。そう言いたい人間？」

「確かに、理になってる。力こそ全て」

「2対1は卑怯ね、私も加勢するわレミィ」

こうして俺とフラン対レミリア&パチュリー戦が開幕された。

「先にルールを決める。残機は3。スペカの使用制限は3。味方からの当たり判定は無し。掠り判定は無効だ」

「この小説での掠り判定有無は、

有効ならば掠っても被弾扱い。無効なら掠っても被弾扱いされない。」

「問題ないわ」

「問題無しね」

「では開始!!」

俺の開始宣言の直後、3人はいきなりスペカを発動した。

「スペルカード発動!!【禁忌】フォーオブアカインド」

「スペルカード発動、【金符】メタルファティグ」

「スペルカード発動!!【神罰】幼きデーモンロード!!」

三者三様のスペカ宣言をし凄まじい密度の弾幕が展開され始めた。

レミリアが使用したスペカにより、何本ものレーザーが飛び交う。

パチュリーのスペカにより8つずつに分裂する弾幕が放たれる。

挙げ句味方なのにも関わらず視界を埋め尽くす程の紅弾をすぐ側で放ち続けるフラン×4。

弾幕多杉ワロタwww

「いや確かにスペカ使って良いとは言ったけど開幕は通常弾だろ常考」

「デーモンロードを受けても体制一つ崩さないんじゃないの?」

くそ、レミがドヤ顔で上から目線とか……可愛い過ぎて死ねるwww

「詰めが甘いな」

「？」

「こんなことも有ろうかと100回連打済みなんだよ！！フラン！早くスペルブレイクしろ！！」

「わ、わかった！！」

「この小説でのスペルブレイクは只単にスペカの効果切れを示します。防御がさがったりダメージ補正が入ったりするわけでは有りません」

そう言うなり、一際多く弾幕を放ち、分身を消したフラン。

「それでいい」

ニヤニヤが止まりませんwww

目前まで迫った弾幕が、

カシャッ！

と言うシヨボい音と同時に全て消えた。

「何！？」

「えっ！？」

上からレミリア、パチュリーがお送りしたビツクリボイス！！脳内で再生してくれ！！www

「じゃ、全部ご返却するぜ！」

データフォルダから今し方撮った虹色の水玉模様しか写っていない
画像を実体化した。

「パチエ！！相殺するわよ！！」

「了解」

「スペルカード発動！！【紅符】スカーレットマイスタ！！」

「スペルカード発動【火土符】ラーヴァクロムレク」

お次は紅魔郷のレミリア戦に置いて俺が一番ボムを使う超密度のス
ペルですねwww

パチエのは確か軌道が変化する弾幕だったな。

そんな呑気な事を考えていると、弾幕と弾幕がぶつかり合い、小規模の爆発が起きていた。

「フラン！！弾幕を追加で撃つぞ！！」

「うん！！スペルカード発動！【禁弾】スターボウブレイク！！」

うはwww観客ぶっ飛ばしまくったスペカk t k r！！

フランから様々な色の弾幕が大量に放たれ、レミリアとパチュリーに追い討ちを掛けた。

俺も多量の弾幕を放つ。

その後30秒程持久戦が続き、どうやらパチュリー、レミリアの順にスペルブレイクしたらしい。

「任せてレミィ。スペルカード発動、【火水木金符】賢者の石」

やばい……パチュリーが賢者の石使いやがった…
ハオーポッオーがあ！！wwww

冗談はさておき弾幕を放ちながら余裕の100回連打を達成した俺。
取るべき行動は一つ。

「はい残念」

俺はパチュリーの出した石を全て写真に収めた。

「くっ！！」

フランのスターボウブレイクによりパチュリーが3回被爆し、離脱

した。

「空氣的に俺も離脱だな」

相殺仕切らなかったレミリアの弾幕にワザと3度被爆し、俺もリタイアした。

俺のリタイアと同時にフランのスターボウブレイクも終了した。

「ねえ様……」

「フラン……」

「私が勝つたら……本当に自由にしてくれるの？」

「……………」

「応えてよねえ様!!」

「あなたは何も分かってない……」

「何が!？」

「私がフランを閉じこめたのはあなたを守るため。でも…それだけじゃなかった……」

「……」

「心のどこかでフランを怖がってたのかも知れない。だけど……」

「もういいよ、ねえ様」

「えっ？」

「フランはねえ様が好き……だから怖がられようと……フランの好きは…変わらない」

徐々に涙を流しながら話すフランに目を丸くするレミリア。

「ねえ様は……ひぐっ……フランの事……どう思ってるの?」

「私もフランが好き……そんなの……当たり前じゃない……」

「じゃ……あ……お願い……フランが……勝ったら自由に……して」

「それは……」

「その時……は大丈夫だよ……お兄ちゃんが……居るから」

「お兄ちゃん?」

「お兄ちゃんと約束したの……フランのお兄ちゃんになってって。それで……守ってくれる……って」

「そう……ならもう……何も言わないわ、全力で来なさいフラン!」

「うん!!」

「スペルカード発動!! 【神槍】 スピア・ザ・グングニル!!」

「スペルカード発動!! 【禁忌】 レーヴァテイン!!」

決戦！！【フランドール対レミリア】

フランは漆黒の剣を、レミリアは紅蓮の槍を手に、翼を広げ、物凄い早さで飛び交った。

2つの紅い影が交差する度に発せられるかん高い金属音と火花。

さらにはお互い弾幕を張り巡らせ、どんどん窮屈な戦いになっていく。

そして激戦の最中、レミリア、フランの両方共2度被弾し、尚も攻撃の手を休めず、切り、突き、なぎ払い、振り下ろし、激戦は長いこと続いた。

やがては弾幕を出す余裕も無くなり、ただの肉弾戦と化し、遂に決着が付こうとした。

「ハア…ハア…こんなに本気で戦ったのはいつぶりかしら……」

「ハア…………ハア…………フランもねえ様と遊ぶの久しぶりで嬉しかったよ？」

お互い肩で息をしながら対峙する。

「終わりにしましょう」

「そうだね」

レミリアはグングニルを全力投球した。

フランもレーヴァティンを全力で振り下ろした。

レミリアの投げたグングニルは光の軌跡となり――

フランの振り下ろしたレーヴァティンは紅い衝撃となり――

それらはぶつかり合い、靈力が尋常じゃ無い量溢れ出し、大爆発を引き起こした。

立ち込める爆煙の中、息を飲んで見守る俺とパチュリー。

煙が晴れるとそこには傷だらけになりつつも立つレミリアと倒れたフランの姿があった。

「俺達の負けか…」

「負けたわ——」

「え？」

バタリとレミリアも倒れ、気を失う前にレミリアはこう言った。

「最後の爆発の前……私のグングニルは威力で押されてた……でもフ
ランはワザと威力を落として均衡させたみたい………ほんっと……バ
カな妹ね……」

レミリアはそのままカクンと意識を失った。

「バカはねえだろ——実の妹に」

ボタン！！！！！

背後で扉の強く開かれる音がし、振り返ると霊夢、咲夜さん、初登
場の魔理沙が居た。

「お嬢様！！妹様！！」

「遅かったわね…」

「しょーがないなあ」

「あんたたち……また来たの？」

咲夜さんはフランとレミリアを抱えてから消えた。

俺は霊夢と魔理沙に話し掛けた。

「あの結界…よく壊せたな」

「アタシのファイナルマスタースパークと霊夢の夢想天生でぶち破ったぜ」

「堅すぎでしょあの結界……それで漸くヒビが入って私がこじ開けたのよ」

「流石だな。魔理沙の案か……俺は鬼澤颯。よろしくな魔理沙」

「おう、よろしく。ってなんでアタシの事知ってるんだ？」

「幻想郷で魔女といったら数える程しか居ないだろ？」

「つまり私が有名ってことだな!!」

「泥棒でね（ボソッ）」

「死ぬまで借りてるだけだぜ」

俺達が話していると、妖精メイドが一人来て、こう言った。

「メイド長からの伝言です。

2人は明日になれば目を覚ますそうです。

颯様は厨房に行つて下さい。

もうお昼近いですが朝ご飯が用意されてます」

「何から何まで悪いな」

「それと博麗の巫女と霧雨嬢はメイド長がお戻りになられるまでここで待っていて下さい」

「面倒ね」

「問題ないぜ」

「では私はこれで……」

俺は霊夢達と別れ、『k i t c h e n』とプレートが掲げられた一室を探し当て、遅めの朝食を取ることにした。

一週間の休息

俺は朝食のトーストとベーコン、スクランブルエッグを食べ終わり、昨日使っていた部屋へ戻った。

奇跡的に迷わずに部屋へと到着した俺は部屋のドアノブに手を掛けた。

その時、携帯の着信音が鳴り響いた。

因みに着信音は もう歌しか聞こえない だw w w

携帯を開き、メールを確認すると、

『褒美としてアプリの強化と追加をしておいた。
一週間の猶予をやる。その後は次の世界だ、その世界の悪が葬られたら幻想郷に戻る』

b y 神

ふと思つた感想。

GANTSUか!!!!

俺は返信ボタンを押し、こう返した。

『紅魔郷はこれでクリアなのか？俺はフラン、レミリア、パチュリ
ーに勝つただけだぜ？』

直ぐに返事が来た。

『この場合、レミリアがフランドールを自由にする事を許した。そ
れだけでレミリアは計画を中断した。つまり一応異変は解決された
事になる。』

因みに全ての世界の時間は統一している、別世界へ行き3日滞在し
たら幻想郷でも3日経っていると覚えておけ』

b y 神

成る程。要はフラン助けたから万事解決ってわけか。

よくよく考えると俺レミリア倒して無いじゃん。

つと——そんな事考えてる場合じゃなかった。
ミスティアだミスティア。

早く会わねば時間が無い！！！！！！

俺は窓から外へ飛び出し、中庭を抜けて門前へと来た。

「おい美鈴！！！！！！」

「ね、寝てませんよ！！ってあなたどうして紅魔館から出て来たんですか？」

「お前が寝ている隙に入った。それから咲夜さんにこの事をバラされなくなったら一つ頼みを聞いてくれ」

「内容によりますがわかりました」

美鈴はこれからどんな仕打ちを受けるのか若干怯えながら生唾を飲んだ。

「簡単な事だ、妖精メイドでも咲夜さんにでも誰でもいい、『今日中には多分戻る、服は昨日使った部屋に置いてといて下さい』と伝えてくれ」

「わかりました。えっと――」

「鬼澤颯だ、宜しく紅美鈴」

「はう……私の名前知ってるんですか？……凄く嬉しいです……」

中国がデレたwww
らしくないwww

「因みに俺見てのとおり紅魔館の短期執事だからよろしく美鈴先輩」

当然、次に入るときのための口実だ。

「はい！！お気を付けて！！」

よし、美鈴は完全に騙せた。

俺は紅魔館を後にし空を飛んだ。

「湖発見！！？発見！！目標を駆逐する！！」

高度約500m、眼下に映る日本じゃまず見られないであろう素晴らしい景色の中、紅魔館から数百m離れた場所にかなり大きな湖を見つけた。

千里眼により湖の上で無邪気に戯れているチルノ、ルーミア、大妖精を発見し、俺は一直線に飛んでいった。

「やっぱりあたいったらさいきょーね」

「そーなのかー？」

「チルノちゃん、カエルさんを凍らせちゃ駄目だよ」

上からチルノ、ルーミア、大妖精。

どうやらチルノは蛙を凍らせて遊んでいたようだ。大妖精がオドオドしながら止めようとしている。

「くおおらあああ！！蛙を凍らせて遊ぶんじゃない！！！」

「うわっ！？」

「へ？」

「そーなのかー」

俺はチルノに向かって突っ込み、手を抜いたラリアットをかました。

「なにすんのよさいきょーのチルノさまに向かって！！！」

体勢を崩したチルノをすぐさま羽交い締めにした。

「うつせ？、っと…大妖精、聞きたい事がある」

「ふえ？」

「そーなのかー」

「一名無視！！多分ループするから。」

「あんた大ちゃんに変なことしたらムグウ！！」

「俺は鬼澤颯、怪しい者じゃない。
ミスティアを捜してるんだが何処に居るか判るか？」

「喧しい？の口を塞ぎ、話を続けた。」

「うーん……ミスティアちゃんなら今日の夕方に屋台出すって言う」

てたから多分今は準備中だと思います」

「そっか、ありがとな。」

その準備してる場所はわかる？」

「ここから北に行った場所に人里が有るんですけどその近くの筈です」

「わかった、ありが——」

「ぶはあ、スペルカード発動！！【氷符】パーフェクトフリーズ！！」

羽交い締めになっている？の口に当てていた手を緩めた瞬間、ポケットからスペカを取り出し一瞬で発動させやがった……

「ちょ……おま……」

でも分解www

所詮？だ、やはりeasyレベルのスペカしか発動しなかったwww

多量の氷塊をばらまくチルノ。当然当たる前に籠手の能力で分解した。

「いずれまた会おうチルノよ！！」

俺は隙を見計らって携帯の瞬間移動を使い、『人里』と入力し、転移した。

「消えた！？」

「そーなのかー」

一瞬で周囲の景色が変わり、賑やかな商店街に変化した。

「あんだ今いきなり現れなかったか!？」

流石に道行く人に見られたらしい、若干不味い。

「透明になるマジックですよ」

「魔法使いなのかあんだ!!」

話しかけてきたのは中年の鉢巻きをしたオサーンだ。
ここは嘘をついとこつ。

「そつだが？」

「ちょっと手伝ってくれないか？お駄賃は払うから」

「何を？」

「いやあ、実は俺大工やってる茂野^{しげの}って言うんだが木材が不足して困ってるんだ……」

「俺にどうしろと？」

「魔法かなんかでちょちょいっと木材を出せないかね？」

ふーむ、俺にゴミを木に換える力は備わっていないのだが……

携帯を取り出し、武具の召喚を起動した。

分類 杖

強度 俺が消えると言うと存在が消えるがそれ以外では破壊不可。

能力 持っているだけで魔法により木を生成出来るようになる。

出て来たのは言うなればただの太い枝。葉は着いてないが……

「場所は？」

「こつちだ」

俺はオサーンの案内の下、作業場まで来た。

「ん？茂野、その小僧は？」

「失礼な事言うんじゃない！この人は魔法使いだ！！足りない木材を出してくれるそうなんだ」

「そいつぁ助かる!!」

「いくらくれるの？」

「そうだな、杉の木を元の形のまま400kg出してくれ。そして10万円出そう」

（ふん……いくら魔法使いと言えど原型のままで出すなんて無理だろっ）

「10万ね、ok」

俺は杖（枝）を右手に、作業場の空いている空間に意識を集中させた。

すると地面からニョロニョロと一本の木が生え、どんどん大きくなつた。

「これでいいか？急いでるから早くしてくれ」

「すげえ!!」

「なっ!?!」

茂野さんは事務所のような場所に入り、封筒を持ってきた。

(バカな……言の葉も無しに杉の木を生やしたと!?!それも立地条件の悪いこんな場所に!?!)

それを受け取り、中身を確認した俺は一気に空高くまで飛び、千里眼を使った。

「おお……漸く見つけた……愛しのミステリア」

千里眼で人里周辺を隈無く探すと、屋台の前で何かをしているミステアの姿があった。

俺は一直線にそこへ飛び、ミステアの真後ろに着地した。

「ミステア……」

「っ!？」

いきなり声を掛けられ、肩をビクッとさせ驚きながらミステアは振り返った。

「誰……ですか？」

「俺は……鬼澤颯……えと……」

「ごめんなさい、屋台は夕方からの」

「そうじゃない……その……」

「？」

「ミステイア……俺と結婚してくれ!!」

「はい？」

「ハッ……つい本音が!!」

くそ……これで嫌われたらどうする!!? 過去の俺を殴ってやりたい
!!

「クスッ」

「!!!?」

笑われた！！マジどうすんだよ！！この状況！！

「こんな私を好きになるなんておかしな人ですね……私、妖怪なのに」

「そんな事は知ってる。夜雀の怪、ミステリア・ローレイ……だろ？」

「それを知ってるのにどうして私なんかを好きになったの？」

「えっと……それは……心からミステリアに惚れてるから……だ」

言ってて恥ずかしい。

顔から火炎放射できんじゃない？

「でも私…人間と……って……どうなんだろ……？」

「すまん、さっきのは——」

「こんな私で良ければ……でも……いきなり結婚は………」

「な、なら……！友達からでいい……！いきなり出会い頭に言われても困るセリフだったろうし……！」

「友達………」

「ああ……！えと……駄目すか？」

「わかった」

「ありがとう」

（ヨッシャアアアアア）

どうにかミステイアと関係を持てた！！今なら死んでも……いや、まだ早い！！

「あつ、それ手伝おうか？」

「えっ？いいの？」

遠くからだったからわからなかったがどうやらウナギに串を刺していたらしい。

下準備ってやつか。

「じゃあそこで手を洗って来て」

「おう………あつ、そうだ消えろ！！」

消すのを忘れていた杖を消し、俺はミスティアに指さされた屋台に備え付けてあるボトルから水を出し、籠手を外し、置いてあった石鹸を使い、手を綺麗にした。

「じゃあこの捌いてある八目鰻に4本串を刺して？私は下焼きするから」

「了解した」

言われた通り鰻に串を刺していき、作業すること1時間。

だいたいの下準備中が終わり、現在3時頃だ。

ミスティアが焼いた八目鰻を手伝ってくれたお礼として一枚くれた。

「うまつ！！特にタレが美味い！！」

「あっ！！山椒使う？」

「いや、そのまま大丈夫」

素でうまかった……

「まだ結構時間あるけどどうするんだ？」

「うーん……いつも時間は余らないから……どうしようかな……」

ふむ、どうやら暇なようだ。

そっだ、今更ながら追加されたアプリとやらを見ようか。

「どれどれ……」

強化されたアプリ

†弾幕切り取り機能

100回連打を改善し、10秒間決定長押しで一枚撮れるようになる。ただし長押ししている最中は動きが鈍る。

低速移動化ですね…わかります。

追加されたアプリ

†簡易式一軒家機能

このアプリを起動するとペンが出てくる。そのペンで地面に範囲を描く。その範囲から適合一軒家を瞬時に建てる。

正直、パナい。

†四次元ポケット機能

今までに生成した武器を四次元に収納することができる。出し入れ自由。

ドラ○もん乙ww

↑破壊のゴミ箱

今までに生成した壊れない武具を上書きして破壊する。

要は使い飽きた武具を消せるわけか。

以上だけらしい。

いやあゝ神の力すばらしいっす。

俺はさっそく4次元ポケットを使い、籠手と眼鏡を収納した。

「それってケータイって言う機械だよな？」

「何で知ってるんだ？」

「以前、夜の屋台に天狗が二人来て確か『姫海棠はたて』って天狗が教えてくれたの。色は違うけど形が似てたから」

「ふむ、是非ともメル友になって頂きたい……いや…待て、念写でプライベートフォルダの画像を撮られたら……」

俺は神にメールし、念写耐性を希望した所、既に掛かっているとのこと。

「流石神www用意が良すぎるwww」

兎に角暇だ……

うつむ…ゲームが無いとやることに困る…

折角ミステリアと二人きりなのに……ん？

急激に心臓が鳴り始めましたよ。ええ。

「どうしたの？顔色が真っ赤だけど…？」

「べべ別に何でもない！！」

一方でミスティアは何か紙見てるし。

「何見てるんだ？」

「な、何でも無いよ！！」

気になる。俺は眼鏡を取り出し、千里眼で覗き見してみた。

「歌詞か。いい詩じゃないか」

「な、何でバレたの!？」

「実はこの眼鏡、透視機能が付いているのだよwww
だからみすちーの服の下も……」

「きゃあああ!？」

「冗談だよwww」

そう言って目を逸らす俺。

ミステリアの照れ顔とか破壊力テラヤバス!!

「もう、颯さんのえっち」

「」

今なら死んでいい。

てかその台詞駄目www

色んな意味でNGだわwww

「その歌詞ミステリアが考えたのか？」

「えと……そうだけど……」

「プリズムリバー三姉妹に頼んで作曲して貰えば？普通にCD出せるレベルだと思うけど……」

「しーでいー？」

「CD無かった。兎に角名曲になりそうって事」

「あ、ありがとう／＼／」

照れるなつて。目を逸らさないと俺が死んでしまうwww

「しかしこうもやる事が無いと暇だな」

「夕方になるまでまだ1時間ぐらい有るしね」

「むう……」

結局何をするでもなくミスティアと暫く話し気付けば日が沈みそうになっていた。

「そろそろお店開けなきゃ」

ミスティアは屋台を後ろから押し始めた。

が、当然俺はミスティアをどけて屋台を押す。

「そんな…悪いしいいよ…」

「気にするな。俺が好きでやってるんだ、礼も要らない」

「優しいんだね」

「ミスティアにだけな」

「んーん、何か他の人にも優しいそうな気がする」

「そうでもないさ、俺は嘔吐きの臆病者だし」

「優しいに加えて謙虚なんだね？」

ミスティアの楽しそうな笑顔に、俺も自然と頬が緩んだ。

そして人通りが若干多い人里の通りに来ると、車輪を固定し、炭火で鰻を焼き始めた。

ものの数分で数人の行列ができ、みるみるうちに鰻は売れていき、6時には全て鰻は売れてしまった。

「凄い人気だな。確かに旨かったから解るけど」

「でも最近八目鰻の数が減ってきてるからちょっとピンチなんだ」

「取り過ぎは良くないしなあ」

「違うの。前は私や他の人が取り続けていたけど個体数が減らない程度だったの。だけどここ最近湖や川の鰻がやけに早い速度で誰かが大量に取ってるみたいなの」

「成る程ねえ」

そいつを探し出してお灸を据えてやろう。

「今日も売れるのが早いな」

「どうも妹紅さん」

「もこたんキター!!」

突如現れたもこたん!!
ナマもこたんwww

「誰だお前？」

「失礼、俺は鬼澤颯、ご機嫌麗しゅう藤原妹紅さん」

「こりゃ、丁寧にどうも」

「今日はもう売り切れです。すみません」

「まあまた今度でいいや」

「明後日は居酒屋として湖畔の近くに開いてるんで良かったらどうぞ」

「そいつはいい。慧音と一緒に飲みに行くよ」

そう言い残して妹紅は立ち去り、俺はミステリアと一緒に屋台を方付け始めた。

「何から何までありがとうね」

「だから気にするな、俺が勝手にやってるだけだって」

「そうだったね」

俺はふと思った。

ミステリアは何故今日会ったばかりの俺にこんなに打ち解けてくれたのだろうか……

いや、けしかけたのは俺だが…

その事をミステリアに尋ねると意外な理由を教えてくれた。

「私……そんなに友達とか気軽に何でも話せるような人も妖も居ないから少し嬉しかったの。」

そりゃあ常連のお客さんも居るけどあくまで人付き合いだったから……」

「そうか……チルノとかは仲が良いんだろ？」

「まあ仲が良いと言えばそうなるけど実際チルノちゃんの無茶に振り回されてるだけな気が……」

「それ言ったら大妖精の方が苦労人な気がする」

「あはは……そうだね。
でもよく知ってるね？」

「幻想郷に住んでる力ある者達の事は大方知ってる。特にチルノとかは三月精の自機キャラとして優秀な能力を発揮してたし」

「自機キャラ？」

「まあこの世界で言うゲームとはまた違う感じのゲームなんだけど……携帯じゃ出来ないしなあ」

「へえ。ゲームなら香霖堂におかしなゲームがいっぱいあったけど……」

「あの禪眼鏡には気を付けろよ？平気で幼女を襲う変態だからな」

「霖之助さんが？」

「そうだ、特に博麗神社での宴会では気を付けろ」

「いつも魔理沙に無理やり酒吞まされて直ぐに酔いつぶれてるから」

大丈夫だよ」

「ならいいが……」

俺とミスティアは話しながら屋台を動かせる状態にした。

そして俺が屋台を押しながらミスティアについて行っているとミスティアが唐突に止まった。

「どうした？」

「囲まれてます」

「……………」

俺は無言で携帯の四次元ポケットから籠手、眼鏡を取り出し、装備した。

そして千里眼で周囲を探ると狼の一群のど真ん中に俺とミスティア

が居ることに気付いた。

「わり、気付かなかった」

「問題ないよ、行こ？これ以上暗くなったら夜目の効かない人間じゃ危ないし」

「暗視スコープ創ればおk」

「あんしスコープ？」

「どんなに暗い場所でも見えるようになる眼鏡みたいな物だよ」

「人間にとっては便利なんだろうね」

ミステリアは普通に歩いて進んでいる。
その間、千里眼で様子を伺っていた狼達が地面でのたうち回っているのが確認できた。

「鳥目の能力か」

「ほんと、何でも知ってるんだね」

「まあな」

視界を奪われた狼達は混乱し、俺達を襲う所じゃないらしい。

素通りし、そのまま歩くこと約10分、林の中に一軒の家があった。

「ここまでありがとう」

「ここがミスティアの家なのか。意外としつかりした家だな」

「意外って何よ？」

ミスティアは頬をぷくと膨らませて怒った素振りを見せた。

無理、直視できないwww

「颯はどうするの？」

「紅魔館に行かなきゃな。服を置いてきてるんだ」

「そっなんだ…」

「また明日来るよ」

「うん。またね」

ミスティアは屋台を家の横に置くと家に入っていった。

俺は紅魔館へ戻るべく空へ飛翔した。

短期執事だと！？またミステリアに会う機会が……

俺は無事何事もなく紅魔館の門前まで飛び、着地した。

「お帰りなさい」

「おう美鈴先輩。起きてましたか」

「し、失礼ですね……」

「悪い悪いwwじゃ頑張ってたな」

門を通過し、紅魔館に入ると咲夜さんが出現した。

「今まで何処に行ってたんですか？」

「まあちよいと野暮用で。何か用か？」

「服は部屋に置いておきました。それとお嬢様がお呼びです、広間へ行って下さい」

「目を覚ましたのか」

「はい、妹様も。では私はこれで――」

「待ってくれ！！広間が何処にあるか解らない」

「仕方ないですね。では着いてきて下さい」

俺は咲夜さんの案内により広間前まで来た。

「では私はやらねばいけない事があるので」

咲夜さんは一瞬で姿を消した。

俺は扉をノックした。

「俺だ」

「入って」

言われた通り扉を開けた瞬間、腹部に走った衝撃により俺は1m弱吹っ飛ばされた。

「ぐ…苦しい」

「遅いよおゝお兄ちゃん!!」

扉を開けた瞬間に走った腹部の衝撃はフランによる抱きつき攻撃だった。

「起きれないから退いてくれフラン」

「えへへ、やだ」

「俺はレミリアと話があるんだ、後でいくらでも付き合ってやるから今は退いてくれ」

「むう………わかった」

渋々といった様子でフランのなかなか強い腕力から解放され、立ち上がった。

広間へ入り、椅子に座るよう促された。

近場の椅子に座り、話を聞こうとしたその時、膝にちょこんとフランが座ってきた。

正直、フ란のデレが半端じゃないwww

「何の用なんだ？」

「ただ、お礼を言いたいただけよ。今日は…フ란と仲直りするきっかけを作ってくれてありがとうね」

「まあ礼を言われるほどの事じゃない、欲で行動したまでだ」

「なんの欲よ？」

「そいつは言えない。まあ強いて言い換えるなら俺が幻想郷で生きるため…かな」

「よくわからないわ。あなたの事が。何せ運命が見えないのよ」

「やっぱりか、幻想郷の外の世界の運命は見透かせないみたいだな」

「外の世界？」

「まあいい。話は終わりか？」

「私に出来る事があつたら何でも言つて。恩返しの一つも出来ない
と紅魔館の主としての恥だし」

「そうだな、一つ聞きたいんだが」

「何でも答えるわ」

「フランを幽閉した理由は……やっぱり八雲紫が絡んでるのか？」

「そうだけど何でそんな事知ってるの！？」

「まあ気にするな。それとフランの事だが……多分、俺が分解した
狂気は……一時的な物だと思うんだ」

「どづいづいと……？」

「ストレスが溜まればまた再発するってことだ。
根っこから分解したらそれこそフ란の人格まで影響しちゃう。
これ以降ストレスかなんかしらのきっかけで発狂するかも知れない」

「成る程」

「対策としてはストレスとかを溜め込ませないかあるいは俺が微弱な狂気を分解し続けるかな。
もっとも後者は何よりフ란が望まないだろうから——」

「あら？なら問題ないわね」

「何がだ？」

「だって、兄妹でしょ？
ずっと一緒じゃない」

Σ（＾ω＾）ギクウ

しまったあああ！！！！
すっかり忘れてたあー！！

ヤヴァイ…余計なフラグ建てすぎた…………

「それが嫌ならいつそ紅魔館の執事になれば？」

「悪いが俺は不定期にこの世界から消えたり現れたりする存在だ。
今日から一週間後、消える。次にいつ現れるかなんて想像もつかない」

「随分と不安定な存在なのね」

「連絡を取る方法はある。
妖怪の山に住む姫海棠はたてつて言う天狗に頼めば会話ぐらいは出来る」

「知らない名ね」

「射命丸文に聞けば分かる筈だ」

「今度焼き鳥にするって言って脅してみるわ」

「ははは……程々にな…俺はそろそろ部屋に戻りたいんだが…」

「じゃあこれは恩を仇で返した罰、一週間の短期執事になりなさい」

美鈴に言ったことが本当になるなんて……

拒否なんか出来るはずもなく…

「わ、分かった」

「では戻ってよろしい!!」

クソッ、レミリアのドヤ顔が心に染みるぜ……

俺は席を立とうとして膝に居座っているフランを見る。

「えと…部屋に戻りたいんだけどフランちゃん」

「ええ！？何で！？」

「いや…あの…」

「後で遊んでくれるんじゃないの！？」

俺……アルツハイマーかもしれない…

すっかり忘れてた…

「わかったわかった、俺かなり腹減ってるから夕飯食べてからでいいだろ？」

「お腹減ってるの？じゃあフランと一緒にご飯食べよう？」

「食べてなかったのか？」

「うん」

一向に退く気配の無いフランをお姫様抱っこで持ち上げ、厨房へ向かった。

厨房には咲夜や他の妖精メイド達が居て、夕飯準備の真っ最中だった。

「あとどれぐらいで出来ますかね？」

「残り4分23秒です」

細かいなおい。

しかし流石咲夜さんだ。

目にも止まらぬ早技で次々に料理を作っていて。最早神レベル
w w w

「と言うわけで広間に戻っていて下さい。お嬢様は貴方にも夕食の
席を用意しても良いと仰ったので」

なんか理由付けられて追い出されたよ。

忙しいみたいだからほっとくか。

「広間に戻りたいんだが…」

此処までの道のり忘れましたw w w

結局フ란の指示で右へ左へで広間に到着した。

この館、広杉です。

広杉とか誰だwww

「どうやら咲夜に追い出されたようねwww」

「分かってて行かせたな？」

「なんの事かしら？」

畜生！！レミリアは根っから意地悪な奴のようだ！！

その後フランをなだめ、どうにか隣の席に座って貰う事で妥協し、カートに乗ってきた夕飯を頂いた。

「いやぁ……これ旨いっすね」

「それはガゼルのステーキです」

ガゼルって食えるんだ、初めて知ったよ。

まあ鹿っぽいし平気か。

レミリアとフランに限っては赤い料理しか食ってないし。

やっぱり血の色だよな……アレ……

「食後のデザートと16年物のテキーラです」

俺未成年なんだけど……

まあどこぞの巫女も常識に捕らわれてはならないとか言ってるしいか。

俺は人生初の酒とショートケーキを楽しんだ。

「意外にサクサク飲める物なんだな」

「あんた酒に強いのかしら……常人なら2、3杯で結構酔っただけ
どそれ何杯目？」

「そうなの！？グラスで8杯目なんだけど……」

ラベルを見せて貰うと度数52と書いてあった。

「52度って高いのか？」

「ねえ様、お兄ちゃん酔わないよ？」

「ここまで酒に強いなんて計算外ね、下手したら喉が焼けるレベル
なのに」

「は？それって……」

「ねえ様がお酒で酔っぱらってたら何しても明日には忘れてるって言ったのに」

「明日レミリアの命日だね。うん」

「じよ、冗談よ！ー！冗談！ー！」

流石に身の危険を感じたのか慌てて弁明するレミリア。

「どうしよっかなーレミリアが意地悪するから紅魔館から出て行っちゃおうかなー」

「ね・え・様・？」

こつこつ事続けるとフラン発狂すんじゃない？

「【禁弾】……スターボ―」

「わーわー！―もう意地悪しないから許してスペルカードを仕舞いなさい！―」

「本当にい？」

「ち、誓うわ」

「安心しろ、用事で出て行く意外、一週間はここに居るから」

「わかった♪」

流石、最終鬼畜妹フランww

コワイコワイwww

俺は食べ終わったので部屋に戻ろうとしたその時、怪力で腕を掴まれた。

やっぱり逃げられないよね〜

「フランの部屋に行ってるから。食べ終わったら一緒に遊んでやるよ」

「ウソ吐いたら怒るよ?」

渋々といった様子でフランは俺の腕を放した。

嘔吐したら死にそうなので俺は地下にあるフランの部屋へ向かった。

地下へのルートは覚えていたので、普通に到着した。

「そっいや地下2階って行ったこと無いな」

フ란の部屋は地下1階にあり、さらに降りる階段があった。

興味本位で降りると古びた木の扉があるのみだった。

「大丈夫かな」

木の扉を押し開くとそこは倉庫になっていて、ワイン瓶や酒樽などが所々にあった。

「埃臭いな……」

俺は木の扉を閉め、階段を登った。地下1階にはフ란が既に来ていた。

「下で何してたの？」

「何かあるのか気になったからちよいと覗いただけだ。酒しかなかったが…」

「あそこには……お酒だけじゃなくて……もっと怖い化け物が居るんだよ？」

「化け物？」

「そんなことよりフランと遊ば？何して遊ぶ？」

化け物？あそこには埃を被った酒樽とか酒瓶しかなかったように見えるが…

兎に角触れてはマズそうなのであえてスルーすることにしよう。

「トランプとかあるか？」

「とらんぷ？何それ？」

どうやら幻想郷にはトランプは存在しないらしい。

「色んな遊びが出来るカードだよ」

「面白そうだね」

「面白いんだよ」

俺は携帯の武具生成機能で、できるかは解らないがトランプの生成を試みた。

名称 トランプ

分類 カード

強度 ただの厚紙

能力 いかさまが出来ない

使用後自動シャッフル

無くなっても集まってくる

枚数 j o k e r 2枚含む一式

どうやら成功のようだ。

トランプがバラバラと床に落ちた。

ケースぐらい用意しろよ…

落ちたトランプを裏表の統一をしながら一束にまとめた。

「これがとらんぷ？」

「そうだ。2人で出来るゲームはポーカーとか七並べとか…ブラックジャックぐらいだな」

「ブラックジャック？お医者さんの？」

「何故知っている！？」

「パチュリーの図書館にあったよ？確かまんがって言う絵本の中に」

よし、暇なときは図書館に行こう。すげー気になる。

「で、何する？」

「じゃあブラックジャック！！」

「ルールを説明するぞ、トランプを2枚以上引いて描かれている数

字の合計がより21に近い方が勝ち。因みにAは1でJが11、Qが12、Kが13だ」

「わかった」

俺はフランとの間にトランプの束を置き、交互に2枚引いた。

持ち手はダイヤのQとハートの6。
出だしは18だな。

この時点だと3を引けば勝てるが……パスだな。

「まだ引いて大丈夫そうだったら引いて良いぞ？ただしオーバーしたら負けだからな？」

「えーとKが13だから……もう一枚引くね？」

フランはどつやらKを持っているらしい。3枚目のカードを引いた。

「21だよね？」

「そうだ」

「ピッタリだよー!!」

なん……だと…？

互いに手札を公開すると、フランはスペードのK、ダイヤのA、クローバーの7だった……

「凄いな」

「えへへ」

「どうする？もう一回やるか他のにするか？」

「うん……じゃあさっき言ってたポーカーってやつ」

「ポーカーか、役を覚えないと始まらないなあ……」

俺は一通りフランに役とルールを教えた。

意外にも早く覚え、すぐにやることになった。

「じゃ配るぜ」

交互に5枚配り、持ち手を見る。

スペ5、スペ2、クロ4、クロ5、クロ8。

このままだとただのペアだな。

「さっきも言ったとおり、要らないカードは一度だけ一旦山札に戻して引き直す事ができるがどうする?」

「うーん…3枚かな」

「わかった」

俺はスペード2枚を山札に戻し、フランに3枚、手元に2枚置き、山札に戻した。

結果、スペ8、jokerが手札に加えられ、俺の役はjokerを8に換える事で、トリプルになった。

「そいじゃあ見せ合つか」

「えつとふるはうす？」

フランの手元にはハートA、クロA、クロ9、ハート9、joke
rがあった。

「ははは！！また負けちまった。フランは強いなあ」

「い、ごめんね／＼」

「いやいや、負けは負けだ、俺の運がなかったただけだしな」

「他には無いの？みんなでできるゲームとか」

「沢山あるぜ？広間に行ってみるか？」

「うん！！みんなで遊びたいし」

俺とフランは広間へ向かい、扉をノックした。

「入っていいか？」

「どうぞ」

広間へ入ると、夕食を食べてるパチュリーと小悪魔と美鈴が居た。

「うわ！！パチュリー様気を付けて下さい！！あの人が変態ですよ！！」

早速フラグ建てやがってえー！！！！！！

「変態？」

「ご、誤解だ！！あれは不慮の事故で……」

「私の使い魔、高いわよ？」

「ちょ、パチュリー様！！」

今日は調子が良いのだろうか？パチュリーはクスクス笑っていた。

「夕飯食べ終わってからでいいからトランプって言うカードゲームしないか？」

「トランプを持つてるの？」

おや？パチエさんはトランプを知っているようだ。

「前に本で読んだわ。外の世界にある遊戯道具と書いてあったわ」

「正解。美鈴もどうだって……顔色悪いぜ？」

「……ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい……」

うわー！！ひぐらし化してる！！

「居眠りしてるところを咲夜に見つかったらしいわ」

「成る程、可愛そうに」

美鈴には不戦勝でいいか。

俺とフランは会話しながらパチュリーと小悪魔が食べ終わるのを待った。

パチュリーの管理している図書館にはかの有名なスキマババアが外から本を持ってきて置き場になっているらしい。

「だからブラックジャックとかあつたんだ…外から万引きしてんのかあのババ………」

誰力ナ？僕ノ首ヲ絞メテイルノハ？

後ろには正真正銘八雲紫が隙間から上半身だけのぞかせていた。

「今誰のことをババアって言おうとしたのかしら？」

ヤバい、首からギリギリって音がしてる…

死ぬwww……

「まゝさか、紫様の事なわけないじゃないですか」

「それは良かったわ」

いつか絶対に報復してやる！！覚えておけ隙間ババアめ！！

まさかのデュエル！？【八雲紫戦】（前書き）

どうも、作者です。

この章はリア友からのリクエストで作ることになった章です。

度々こんなことが続かなければ良いんですが……

まさかのデュエル！？【八雲紫戦】

「知らないの？私少ななら心も読めるのよ？」

解放された首が再度絞められそうになった瞬間、フランが紫の目前にレーヴァテインを構えた。

「お兄ちゃんをいじめると…フラン怒るよ？」

「待て待て待てフラン！！俺とゆかりんは仲良しだからじゃれてただけなんだ！！虐められてたわけじゃない！！」

「はぁ？何言つて——」

（空気読め！！フランが発狂したらどう責任を取る！？）

「ふん！！あんた外人よね？」

「そうだ」

外来人とは幻想郷の外からやってきた者の事を言います。

「出身は？」

「日本だ」

「なら遊戯王は知ってるわね？」

「一応プレイヤーだが…」

「そう。ならデュエルよ!!」

はぁ！？いきなり何だ！？

「私に勝てたらさっきの発言、聞かなかった事にしてあげるわ」

「む…ゆかりんとは仲良くしたいし……いいだろう、ちょっと待ってろ」

ノリでデュエルすることになった俺は携帯の武具生成機能で生前使用していたデッキと全く同じものを生成した。

そして戦いが始まった。

「デュエル!!」

先行は紫。

「ドロー。異次元の女戦士召喚、カードを2枚伏せてターン終了」

恐らく次元帝だろうな。

紫だしwww

「俺のターン、ドロー!!」

手札

サイクロン

コアキメイルドラゴ

仮面竜

王宮のお触れ

未来融合フューチャーフュージョン

氷眼の白夜龍

「俺は未来融合を発動、対象はF・G・D。デッキからブリザード

ドラゴンを2枚、レッドアイズダークネスメタルドラゴン、紅眼の飛竜、ミンゲイドラゴンを墓地へ送る」

「ドラゴンデッキね」

「俺はカードを2枚伏せ、コアキメイルドラゴ召喚！！異次元の女戦士へ攻撃宣言！！」

「異次元の女戦士の効果、コアキメイルドラゴと異次元の女戦士を除外するわ」

紫LP7600

俺LP8000

「ターン終了！！」

「私のターン、ドロー。手札から異次元の偵察機を召喚。ダイレクトアタック」

紫LP7600

俺LP7200

「ターン終了」

「俺のターン、ドロー!!、スタンバイで未来融合のカウント1」

手札

仮面竜

氷眼の白夜龍

ホルスの黒炎竜LV4

場

表、未来融合

裏、王宮のお触れ

裏、サイクロン

「俺は何もせずにエンドフェイス、墓地の紅眼の飛竜を除外しレッドアイズダークネスメタルドラゴンを特殊召喚！！ターン終了」

「私のターン、ドロー。異次元の偵察機を生け贄に光帝クライス召喚！！効果によりレッドアイズダークネスメタルドラゴンと右側の伏せカードを破壊！！」

サイクロンとレッドアイズダークネスメタルドラゴンが破壊された代わりに俺はデッキからカードを2枚ドローした。

因みにクライスは召喚したターンには攻撃できない効果がついている。

「ターン終了よ」

「俺のターン、ドロー！！」

手札

仮面竜

氷眼の白夜竜

ホルスの黒炎竜LV4
融合呪印生物 闇
ドレッドドラゴン
禁じられた聖杯

「スタンバイ時にEXデッキよりF・G・Dを融合召喚！！メインフェイズ、俺は手札から仮面竜を召喚しカードを一枚セット、FGDでクライスに攻撃！！」

「残念、ダメージ計算時、手札からオネストの効果発動、攻撃力+5000で7400！！FGDは光属性の戦闘では破壊される！！」

紫LP7600

俺LP4800

「ぐっ……ターン終了」

「エンドフェイズ時、リバースカード発動、異次元への隙間発動！！属性は闇！！」

「悪いな、チェーン、王宮のお触れ。処理順から無効だ」

「ちつ——私のターン、ドロー。手札からゾンビキャリアを召喚、LV6、光帝クライスにLV2、ゾンビキャリアをチューニング！シンクロ召喚、スターダストドラゴン！！」

「次元帝じゃないのか？しかし偵察機は一体……」

「悪いわね、次元帝では無いわ。スターダストドラゴンで仮面竜に攻撃！！」

紫LP7600

俺LP3700

「仮面竜の効果によりデッキから神龍ラグナロクを特殊召喚！！」

「ターン終了」

「俺のターン、ドロー」

手札

氷眼の白夜竜

ホルスの黒炎龍LV4

融合呪印生物 闇

ドレッドドラゴン

死者蘇生

「勝ったな」

「へ？」

「手札より死者蘇生を発動！！墓地よりレッドアイズダークネスメタルドラゴンを特殊召喚！！手札から融合呪印生物闇を召喚し効果発動！！融合呪印生物闇と神龍ラグナロクを墓地に送り竜魔神キングドラグーンを融合召喚！！レッドアイズダークネスメタルドラゴンの効果で墓地からブリザードドラゴンを、キングドラグーンの効果で手札から氷眼の白夜竜をそれぞれ特殊召喚！！」

場

レッドアイズダークネスメタルドラゴン

竜魔神キングドラグーン

ブリザードドラゴン

氷眼の白夜竜

「バトル！！氷眼の白夜龍でスターダストドラゴンを攻撃！！」

紫LP7100

「禁じられた聖杯発動、対象はブリザードドラゴン。ブリザードドラゴン、キングドラグーン、レッドアイズダークネスメタルドラゴンでダイレクト、トドメだ」

合計7400ダメージ。

「ま、負けた……」

「約束通りさっきのは忘れてくれ」

「まあいいわ、許すしましょう」

「お兄ちゃん強いね！！ほんととはさっきフランに手加減してたんじゃないの！？」

フランが目キラキラさせながら聞いてくる。

言えない……アレがただの運ゲーだなんて……

「いやいや、フランの勝ちだよあれは。で、本当は何の用事なんだ紫」

「そうね、とりあえずアナタ誰？」

そっからかよ！！知らない人とデュエルしたんですかあんたは！！

「そうよ悪い？」

「俺は鬼澤颯。よろしく八雲紫」

「よろしくね」

紫はそれだけ言つと隙間の中に消えた。

「フラン、済まんが小一時間待っててくれないか？」

「？」

「後々俺と連絡出来るようにするためだ」

「どこかに行っちゃうの？」

「ああ。俺もどこへ飛ばされるかわからないが……その世界の悪い奴を倒したら戻ってこれるんだ」

「なら我慢する」

「悪いな、パチュリーと小悪魔もここに居てくれ」

「しょうがないわね」

「分かりました」

携帯を取り出し、瞬間移動機能を起動し、姫海棠はたての家の前と入力して決定を押した。

転移先の通りには誰もおらず、寝静まっていた。

「天狗は寝るのが早いのか？」

時刻は夜10時、人間ならまだ起きていてもおかしくない時間だ。

目の前には【姫海棠】と札のある立派な一軒家があり、灯りはついていた。

取りあえず扉をノックしてみた。

意外な事に直ぐに出て来てくれた。

「えっと……誰？」

「姫海棠はたて……頼みがある」

「人間！？どうやって里に……それよりも頼みって？」

俺は無言で携帯を取り出した。

「携帯を持ってるってことは……外来人？」

「そうだ。アドレス帳に登録しといてくれ。俺は鬼澤颯、現在紅魔館の執事をやってるんだが……」

俺は事の次第を全て話した。

現れたり消えたりする存在だと言うこと。

消えた時の連絡手段が携帯しか無いこと。

等々。

「別にいいわよ」

「本当か！？助かる」

「しっ……あんまり大きな声出さないで。本来椋の目に見つからないこと自体奇跡に近いのに騒いだら見つかるわ」

「そうだな」

赤外線通信でお互いのプロフを交換した。

厄神様と芥川龍之介の河童

「でもあんた別世界に行くんでしょ？普通に考えて電波通じくない？」

「その点は大丈夫だ、俺の携帯は世界を無視できる。要は圏外にならない」

「ふうん。そうだ、仲介人になってあげる代わりと言っては難だけど……明日歩いて妖怪の山を登ってここまで来てくれない？」

「別にいいが何時頃だ？」

「じゃあ12時ジャストに登り始めて」

はたての意図が解らないが断る訳にはいかないだろう。

疑問に思いながらも承諾した。

「邪魔したな、俺は帰る」

「あそ。じゃあ明日に会いましょう」

俺は瞬間移動で紅魔館の広間へ転移した。

「わっ！！びつくりした」

「悪い悪い。それと明日用事が出来た、今日は早く寝たいからワンゲームな」

「わかった」

「じゃあ何する？無難にババ抜きとか？」

「4人なら確率的にいい具合ね」

そうか、パチユリーはトランプのゲームを知っているのか。

「じゃババ抜きだな。ルールはjokerを最後に持っていた人が負けて手札が無くなった順に勝ちだ」

「なんか簡単だね」

「いやいや、意外と奥が深いぜ？」

俺はjoker一枚を除いたトランプの束を4等分し、全員に配った。

「じゃあ始める。先ずは同じ数字のカードが2枚あったら手札から2枚とも出してくれ」

「わかりました」

「ええと、これとこれかな？」

場には各自がペアのカードを出し、全て出し終わったところでゲームが開始された。

「じゃあ俺から時計回りにカードを取って行くから手札にもっているカードと同じ数字のカードを引いたら捨ててくれ」

順々にカードを引き合い徐々に枚数が減り始めた。

そして一番最初にあがったのはパチュリーだった。

「今回は運が良かったわね。じゃ最後の一枚をフランに渡すわ」

「あつ!!」

ん? j o k e r引いたか。

右から2枚目だな。

「じゃあフラン、パチュリーが外れたから俺はフランからカードを引かなきゃいかん」

「う、うん」

俺は右から2枚目のカードを引いた。

引いたカードがj o k e rだと思っていた時期が僕にもありました
w w w

いや物理的におかしいだろ！！物理の授業なんてまともに受けてなかったけど俺でもわかる、これは怪奇現象だ！！

フランはカードを一切入れ替えていない。つまりパチュリーから引いた最後の一枚がjokerじゃなかった以外には手札の順からいって確実にjokerになるはずだ。

「ハッ、もしか……」

イカサマが出来ない能力……なのか？

高性能杉クソワロタwww

それ以外に可能性は無いな。

「どうかした？」

「いや、何でもない」

気付けば俺が引いたのはペアとなりうるカード。

そして残り手札が3枚で2枚減るから……上がりだ。

ついでに俺の手札にあるのがクローバーのA、小悪魔の手札が1、フランも1。とすると……

「あがり……ですね」

ヤバイこれでフラン覚醒のお知らせとか特にヤバイ……

「むう…今日は負けちゃったけど次やるときは絶対勝つからね!!」

発狂はしなかったようだ。怒ってはいるけど。

「おう。じゃあ片付けて部屋に戻るわ」

テーブルの上にあるトランプをまとめ、俺は広間から仮自室へと戻った。

「そついや寝間着が無いな……」

なんとなく部屋に備え付けてあったタンスを開いてみると何故か紺色のジャージが上下2セット入っていた。

「咲夜さん有難う御座います」

堅苦しい執事服からジャージに着替え、ベッドに入り眠りに就いた。

翌朝――

携帯の目覚まし音が鳴り響き、俺は目を覚ました。

「目覚まし機能付いてたんだ……」

鳴り響く目覚まし音を止め、ベッドから這い出た。

「あと4時間暇だな」

とりあえずタンスから俺の着ていたTシャツとジーンズを取り出し、着替えてから部屋を出た。

「お、さっきゆん発見」

凄いデジャヴだ。咲夜さんが昨日の朝拭いていた窓を拭いていた。

「おはようございます」

「おはよう。てか紅魔館の窓全て毎日拭いてるの？」

「日課なので」

なんか……人として敗北した気がする。

迷うほど広い紅魔館全ての窓とかwww

1日かかって無理な希ガスwww

「因みに何枚位あんの？」

「数えたことがないので解りませんね」

とどのつまり数え切れないほどあるわけですね、わかります。

「厨房に行けば朝食が有りますので良かったらどうぞ」

「んじゃありがたく頂いてきます」

咲夜さんに別れを告げ、厨房へ向かった。

「今日の朝飯は……スープカレーですか。朝から豪華だな」

厨房にあるテーブルに米とスープカレーを皿に盛り、あっという間に食べ終わり、食器を洗った。

「料理の腕もかなりのものだな。スパイスが絶妙過ぎる」

洗い物カゴに食器を立てかけ、厨房を出ようとしたとき、出入り口付近の床に血のようなものが垂れていた。

「凝固してないってことは……誰か怪我してるのか？」

厨房から廊下に出るとぼたぼたと血滴が続いていて、まるで後を追ってこいとも言っているようで気味が悪かった。

「厨房からいきなり血が垂れてるし来るときはこんなのがあった……とすると入ってから気づかない内に誰かが抜け出ていった事になる……薄気味悪っ!!」

これ以上係わるのはよそう……ホラーは苦手だ……

血滴をスルーし、俺は広間へ向かった。

「誰もいないのか」

「誰か探してるんですか？」

「うおっ！？」

いきなり現れんなしwww

咲夜さんが真後ろから声を掛けてきたようだ。

「ちよいとレミリアを探していてね、所で厨房から血が垂れてって
ただけどなんなのあれ？」

「血？ちよつと見てきますね。

お嬢様なら多分お部屋に居るか」と

「レミリアの部屋どこ？」

「お嬢様のお部屋は最上階の一室です」

それだけ言つと咲夜さんは消えた。

俺は最上階である4階へと登り、一部屋しかない部屋の扉にノックをした。

「俺だ」

「入っていいわよ」

レミリアの許可を得、扉を開いた。

「何か用？」

「実は今日妖怪の山に登らないといけないんだ」

「あつそ。精々死なずに帰ってきなさい」

「理由を聞かないのか？」

「どうせ物好きな天狗が面白半分で歩きで登ってこいと言ったんでしょ」

「そうか、邪魔したな」

「待ちなさい」

レミリアは俺を呼び止めると化粧台の引き出しから赤い石を持ってきた。

「これは？」

「ん……御守りとも思ってくれればいいわ」

「そうか、ありがとな」

俺はレミリアから謎の赤石を受け取り、自室へ向かった。

「で、何でフランが俺の部屋に居るんだ？」

「ち、違うよ？別にお兄ちゃんの匂いを嗅ぎにとかじゃないよ!？」

うん、信じないでおこう。

「じゃあ何で居るんだ？」

「ひ、ヒマだったから…」

「朝飯は？」

「まだだよ」

「じゃあ広間に行ってる。今日はスープカレーだ、旨かったぞ？」

「うーん……でもあんまりお腹減ってないから後で食べる」

どうやらそう簡単に逃げられないようだ。

「とにかく自分の部屋に戻りな。俺は妖怪の山に行かなきゃならないんだ」

「また行くの？」

「まあな」

時刻は気付くと10時をまわっていた。

2時間余裕があるからフランにかまっても問題は無いがそれよりも人里に行きたい。

「帰ってきたらまた遊んでね？」

「ok。じゃあな」

携帯の瞬間移動を使い、人里のはずれに佇むとある館へ転移した。

外は照りつける太陽が忌々しいぐらいの晴天だった。

「紅魔館に比べればアレだが充分デカイ館だな」

眼前に映るのは稗田阿求が住む館。見た目からして一応和式らしい。瓦屋根とか東京じゃ殆どみないし。

「ごめんください!!」

モチのロンでインターフォンなど無い。

まもなくして出てきたのは和服に身を包んだ使用人らしき女性だった。

「どちら様ですか？」

「俺は鬼澤颯、外来人だ。稗田阿求殿に会いたいんだが……」

「少々お待ちを」

使用人らしき女性は館に戻り、しばらくしてから「阿求様の許可が

取れましたのでご案内します」とのこと。

スライド式の扉の先は玄関になっていて、少し懐かしい感じがした。

まあ紅魔館内でアメリカ人みたく土足で歩き回るのが当たり前になりかけてたからかも知れないが。

玄関で靴を脱ぎ、使用人の案内の下、阿求が居るという和室に到達した。

「阿求様、お連れいたしました」

「さがって下さい。鬼澤さんはどうぞこちらに」

目の前の襖を開くと新聞と俺の顔を見比べる阿求がいた。

「はじめまして、稗田阿求と申します」

「はじめまして。俺は鬼澤颯、外来人だ」

「そうですかそうですか、この新聞に載ってるのはどうやら貴方のようですな」

新聞？インタビューとかに答えた覚えは……

「ハッ！？まさか文々。新聞なのか！？」

「ええ、文々。新聞です」

「ちょっと見せてくれ！！」

阿求から新聞を貸してもらい、記事を読む。

固・ま・っ・たwww

記事には写真付きでこう記されていた。

／号外！！件の赤い霧に終止符が打たれた／

最近騒がれていた赤い霧を止めたのはなんと外来人！？首謀者は紅魔館の主、レミリア・スカーレットで話によると日光が鬱陶しいから赤い霧を発生させた模様。

なお、その外来人は鬼澤颯と言うらしく、博麗氏も結界の事に関して良い評価をしている。

現在、鬼澤氏は人里等で見かけられたりするがどうやら定住地は紅魔館のようで――。

「今夜は鴉天狗の丸焼きかな」

「ははは、そう言わずに。それはそうと今日は何の用でいらしたんですか？」

「まあ幻想郷縁起が見ただけだったんだが……」

「それなら構いませんよ。案内させます」

「いや、気が変わった。ちょいと用事があるって言うか……また今度頼みたいんだが良いか」

「いつでもどうぞ」

うつ——こんな薄汚い俺にそんな笑顔を向けないでくれ…

「感謝する」

そう言い残し、和室を出た。

部屋を出ると直ぐに使用人が来たが俺は案内を断り、携帯の瞬間移

動で博麗神社へと転移した。

転移先は境内のど真ん中で、ボロい神社とすっからかんの賽銭箱が窺えた。

「予想通りだなwwwとりま賽銭で巫女を釣るか」

人里で入手した札入り封筒を取り出し、一万円札をピラピラと音が鳴るように振った。

それとほぼ同時のことである。境内に不穏な空気が漂い始め、鋭い視線を感じる。

「うーん、巫女さんが出てきたら倍にしようと思ったんだがなあ」

わざとらしく大きな声で棒読み口調で釣りをしてみる。

「はっ、博麗神社へようこそっ!!」

声が裏返ってるしwww

本堂から慌てて霊夢が出現した。

人間、金が絡むと扱いやすい物だ。

「霊夢を釣るのは金で安定ですわwww」

「う、うるさいわね!!」

霊夢に諭吉さんを2人献上し、神社内の茶の間に通された。

「ちょっとまってて」

茶の間に着くなり霊夢は奥の廊下へと消え、5分程度で戻ってきた。

「はい、お茶と砂糖菓子」

「あざーす」

ちゃぶだい
卓袱台に霊夢が持ってきた砂糖菓子と緑茶の入った湯飲みをお盆から移した。

「で、今日は何の用で来たの？」

「紅魔館での約束、一応果たしに来たって所かな」

「でも私、魔理沙に忠告はしたけど止められなかったわよ？」

「気にすんな。だったら霊夢の顔を見にきたでいいや」

「な！？突然何言い出すのよ！？」

「おやあゝ？意外にもこっち方面のセリフには弱いのかなあ？」

「突然じゃないさ。紅魔館で鉢合わせた時も実際霊夢と話がしたかった……ただそれだけだったからなあ」

「えっ？——ええ！？」

「霊夢の顔が真っ赤っかｗｗｗｗ」

「真っ赤霊夢だｗｗｗｗ」

「なんてな、冗談だ。本当の所は――」

「このっ――」

当然の如く霊夢はキレて、袖口から一枚のカードを取り出した。

「スペルカード発動、【霊符】夢想封印!!」

「その元が欲しいんだよ」

室内なのにも関わらず大玉の弾幕を張るが……

カシャッ！！

あらかじめ構えていた携帯のカメラで全ての弾幕を一気に切り撮った。

「あんた…まさかそれを言うただけにそそのかしたんじゃ無いでしょうね？」

「いやあ、ツンデ霊夢なら確実にやらしてくれると思っていたよ」

「私なら良いけど魔理沙とかだったら消し炭にされるわよ？」

「なに、レミリアやフランに比べれば楽勝さ。

この砂糖菓子とハバネロペッパー位の差があるから大丈夫だよ」

「あのねえ……本気を出せばあんたなんか瞬殺だと思うわよ？」

「俺の結界にヒビしか入れられないようじゃ指一本触れないなww
」

挑発に乗るかと思ったが逆に悲しそうな顔をしてこう言い返してきた。

「正直ヒビが入った事自体が奇跡ね……あんな弱点を補い合った結界は二度と御免ね」

「そうか」

霊夢は無言で立ち上がり、ダンスからまっさらなカードを3枚取り出し、渡された。

「作り方は両手で挟んで効果、弹幕の出方、威力の順に念じるだけ。基本的にどんな効果でも作れるけど強い物ほど精神的に疲弊^{ひへい}するわ」

「おう、感謝するぜ」

白紙のスペカを受け取り、特にそれ以上の用事も無かったので卓袱台に乗っている湯飲みの緑茶を飲み干し、霊夢に帰る旨を伝えた。

「もう帰るの？まあ長居しろとは言わないけど……また来なさい」

「ああ、そうさせてもらうぜ。そついや宴会っていつやるんだ？」

「気紛れね。あんた定住地はどこよ？紅魔館？」

「あと一週間ちよいは紅魔館だ」

「ふーん、その間に宴会があつたら呼びに行つてあげるわ」

「やけに親切だな」

「お賽銭沢山くれたからね」

やはり霊夢釣りは金に限るwww

携帯を開き、時刻を見ると11:49になっていた。

なんか時間経過が速い気がするのは気のせいかな？

瞬間移動機能で妖怪の山の麓に転移した。

「昨日は暗くてわからなかったがこれは……………」

麓から見上げた景色は絵画のデッサンに使われていてもおかしくな
いぐらいに綺麗だった。

暑さを忘れ眺めていると何故か視線を感じる。

辺りを見回しても誰も居ない。てことはもしかや……

「フツ…居るのは解っている。俺にその程度の迷彩は通用しないぜ？」

「ひゅいつ！？な、なんで！？改良して歪みまで消したのに…」

周囲の景色に溶け込んでいた水色が姿を現した。

「おぬし……何者！？」

「チート機械をもった一般ピープルですwww」

迷彩で隠れていたのは河城ニトリ。
お値段異常で有名なあのニトリだwww

「ちーと機械？」

「いやまあ気にするな」

「気になるよ。見せて見せて」

俺は目をキラキラさせているニトリに携帯を見せた。

「ちーと機械って携帯の事だったんだ」

「やっぱ知っていたか」

「そういえば自己紹介がまだだったね、私は河城ニトリ。この先の
滝壺の裏側に住んでるんだ」

「俺は鬼澤颯だ、よろしくニトリ」

てかさっきの感が当たってなかったら俺ただのイタい人だよね！？
否定はしないが。

「所でここは妖怪の山だよ？人間が登る所じゃない」

「姫海棠はたてに用があるって言ったら？」

「何があるって私は止めないけどね、気を付けてね？」

やはりニトリは良い奴のようだ。よかったイメージ通りの性格で。

「それとこの辺は管轄外だから見つからないけど犬走椋っていう警備隊の1人の能力が――」

「知ってるさ、千里眼だろ？」

「ならもつ言うことは無いよ。好きにすればいいさ」

「所で……… 桜は将棋強いかな？」

「え？ちよつと強い程度だけど………」

「聞いてみたただけだ」

うゝむ…確かに千里眼に見つかってワラワラ集まってきたら面倒だ。

今の内に手を打っておくか。

携帯の武具生成機能を起動した。

分類 ネットレス

強度 壊れない

能力

・装備中に機械探知、能力探知に引つかからなくなる。

・装備中、刃物による攻撃を全て回避できるようになる。

・装備中、ありとあらゆる生物と意思の疎通をとることができる。

生成して出来た物は百均で売っていきそうなプラスチックの物のよう
だ。

なんか凄く残念な気分だ…

「手品？」

「いや、こいつの機能だ」

「へえ。その首飾りは何？」

「付けてると探知系の能力と機械に引つかからなくなる」

俺はショボいネックレスを首に提げ、山頂を目指す。

何故か後ろから二トリが着いてきてるが気にしない。

「あれ？誰がいる」

「マジか……ん？」

ふと思ったが転生するときの神と厄神とかその他神ってどうゆづ立ち位置なんだ？

今度話す機会があれば聞いてみるか……

「うーん……すごい厄がこの近くにある気がするのだけれど……」

彼女は鍵山 雛、厄を司る神様だ。

「見つけた！！そのあなた！！」

え？俺ですか？凄い厄ってもしか俺ですか？

雛は俺に近付き、空港でやりそうな身体検査が如く俺の体をベタベタ触り始めた。

「これのようね……」

雛は俺のポケットから赤い石を奪った。

「雛……逆ナンは良くないと思うよ？」

AV的展開になったらどうするの?」

「あら、私としたことがいきなり殿方に…… / / /」

そして赤くなる雛。

ニトリ、それは禁句だろwww

「それ、レミリアに貰った御守りじゃないか」

「この石から物凄く濃厚な厄を感じます」

「だから雛なんでそんなに積極的な? 濃厚な厄を感じるとか捉え方によっては……」

「ニトリ! ストップストップ! それ以上はマヂヤヴァイから止めたげて」

このエロガツパめ、きゅうりでもくわえとけwww

おっと、誰か来たようだww

「とにかくこの石は持っていない方が得よ？周りから厄を集め続けているし」

「逆に凄いな。てかレミリアは何でこんな物を……」

ん？何か変な感じがする……全身がうずうずすると言っか……

本能的とでも言っか、何故か俺はその場から半歩下がった。

その瞬間、俺が居た位置に銀の線が走る。

「なっ！？避けられた！？」

「おまwww首はまずいだろwww」

おかしいな、千里眼には見つからない筈だが……

「あれ？何でこんな所に椋が居るの？ここらは管轄外だし」

「いえ、今は休憩時間なんで。滝壺の裏にニトリが居なかったからここに飛んできたら見えない人間が居て——」

「だからって首は狙うなよ！」

上空から急速に距離を詰め、居合い切りをしたらしい。

まったく、危ない事じゃがって。

2人の面倒な新聞記者

「で、見えない事は置いて妖怪の山を登ると言うのならそれなりの措置を取りますよ?」

「首ねらった奴の台詞がそれかよwww
安心しろ、別に危害は加えないし自分の身も守れる」

「なら何故登ろうとするんですか!?!」

「そこに……山があるからさwww
正確には姫海棠はたてに用事があるからなんだが」

「あの念写天狗にですか?」

「まあそんなところだ」

「なら警戒として私が同行しますが良いですか?」

あれ？なんか普通に入れそうだな…………

「どうして皆こつも積極的なのかね？雖は逆ナンするわ桜はいきなりデートに誘うわ…………私も何かすべき？」

「ち、違いますよ！！私は里のために——」

「ニトリ…………お前はお前で積極的過ぎる気がするんだが…………」

放つといたらその内暴走するぞコイツｗｗｗｗ

「とりまニトリ、お前は自分の家に帰れｗｗｗｗ」

「デートの邪魔って言うのね！！私とは遊びだったの！？」

なにこの昼ドラマみたいな台詞www

椛がドン引きしてるしwww

「椛、誤解だ。ニトリがふざけているだけだ。それとデートだとは思っていない」

「こっちを見ないで下さいこの女たちし！」

おkおk。ニトリ…いぢられキャラのお前は攻めに回りすぎた。

ここからは俺のターンだ。

「ニトリ、ちょっと耳貸せ」

疑問符を浮かべながら近付いてきた二トリに耳打ちでとある小説の一節を思い出せる範囲で語った。

するとみるみるうちに二トリの顔が赤くなり、ひゅいっと一鳴きした後、一目散に逃げていった。

「何を話したんですか？」

「いやあ、中学生の頃に教室でとある小説を朗読したんだ。そして何人かのクラスメートが教室から顔赤くして出て行ったんだ」

「どんな内容なんですか？」

雖なら多分平気だろう。

二トリと同じく耳打ちで教えてみた。

「あらあらまあまあ。それは純真な心を持った少女には刺激が強す

ぎるかしらね」

予想通りだな。因みに読者の方々の中にはもしかしたら純真な方も居るかも知れない。

まさかね、官能小説をね。この場で朗読するとかね、マジ有り得な

おっと、口が石鹼を踏んでしまったかwww

「そっぴや自己紹介がまだだったな、俺は鬼澤颯、外来人な」

「私は鍵山雛、厄を司る神です」

「犬走^{いぬばしり}椀^{もみじ}です。天狗ポリスの監視役兼撃退役です」

いや知ってますよ。

てかさっさととはたてに会わないと。

「柩は着いてくるとして雛はどうするんだ？」

「そうですねえ…よろしければ同行したいんですが…」

「構わないが何も楽しいこと無いかもよ？」

その時上空から影が差した。

見上げるとパンッ——

「ぐぼあっ！！」

靴底で思いつ切り顔面を踏まれ、勢いで受け身を取る暇もなく地面に衝突した。

「いつてえゝ!!」

「今、見ましたよね？」

聞いたことの無い声がしたので顔を押さえていた手をどかし、姿を確認する。

文か。

「馬鹿か!!俺は紳士だ、見るわけ無いだろう!!仮に見えてしまったとしたらそれは事故だし見えぬ振りをするのが紳士なのだ!!」

「とどのつまり見たんですよね？」

「はい見えてしまいましたすいません」

やっぱり人間、即土下座は基本だな。

「まあ別にそこまで気にしてないんですけどね……」

「俺の人生初の土下座を返せ」

「で、何で椀がここに居るんですか？」

「姫海棠に用事があるらしいのでその人間を里まで連れて行く途中です。」

暇なあなたと違って私は警備の仕事で忙しいんです」

「休憩時間じゃなかったか？」

「あなたはちょっと黙っていて下さい!!」

「確か……鬼澤颯さんですよな?」

「そうだが?」

流れるにインタビューされるんだろうなあ。

かつたるいな……

そんな事を考えているとまた1人、誰かが飛んできたようだ。が先の事から上を向かずに着地を待つと、姫海棠はたてが降りてきた。

「ちょっと文、私の取材対象に手を出す気？」

「あれあれえ？誰がそんな事決めたんですかあ？」

なにこの空気www

波乱なヨカーンwww

「はあ、文のせいで計画が狂ったわ…… 椛に見付かって戦闘している所を記事にしようと思ったけど…… 無理なようだから質問に答えられないかしら？」

それで徒歩で来いと言ったのか。

仮に椛が襲ってきても（性的な意味ではない）華麗にスルーして逃げるつもりだったか…

「まだ私の話が終わってないのに勝手に話を進めないでくれる？」

「私はこの人に貸しがあるの、だから優先されるのは私よ文」

言ってることは間違っていないが…… 争うなら迷惑だから他の場所ですぐ勝手にやってくれ……

5人の司りし者

「まあ…なんだ、争いは止めてくれないか？それに俺は姫海棠に頭が上がらない、済まないが取材は姫海棠の後にしてくれ」

喧嘩が止まるなら問題無いだろう。

どうせ似たような事聞かれるわけだし。

「はたての後ならおkなんですか？」

「それで争わないんだったら。俺はこよなく鳥を愛する男だから傷つけ合って欲しくない」

「そ、そうですか…」

私は一旦引きます、はたての取材が終わったら守矢神社までご足労願えますか？」

多分歩かないが別段用事も無いし、守矢神社と言えば早苗さんとか居るだろうし。

今から期待で胸が一杯だ。

「りょーかい。んじゃ姫海棠、手短に頼むぜ」

文はその場から一瞬で消え、はたてによる取材が始まった。

と言っても聞かれたのはどうやって幻想郷に来たか、身長、体重、その他素人の俺でも記事にならない事位判るどうでもいいような事ばかり聞かれ、15分程度で質問は終わったようだ。

「ふむふむ。参考になったわ。それじゃ最後の質問ね、『好きな女性』は？」

テンプレキター

記事にされんのかな……これ……

「ミステリアだ!!」

「そうなんだ。ミステリアも隅におけないわねwww」

やはりみすちーを知っていたか。

てかはたての事を知っているような事ミステリアが言ってたっけ。

「じゃ俺は守矢神社に瞬間移動で行くが……」

この機能って俺以外の人と一緒に移動できるのか？

「うゝむ、とりま試してみるか」

俺は雛の手を取り、瞬間移動で行き先を『守矢神社』に設定し、決
行した。

「触つてればとりあえずは移動出来るんだな」

T O L o v e 的な展開を想像していた時期が俺にもありました w
w

よく考えたら服だけ綺麗に脱げるとかおかしいよね w w w

「あれ？雛も来てたの？」

転移先は例の如く境内。

そして前方から何故か空の籠を持った2人の少女が近付いてきた。

「何で秋姉妹が？まだ一応8月だから夏の筈だぞ？」

「誰？」

「彼は鬼澤颯さん、外来人だそうよ」

「初めまして、秋静葉あきしずはです」

「秋穰子あきみのりこと申します」

「雛の言った通り、俺は鬼澤颯だ。以後よろしく」

「あなた達はどうして守矢神社へ？」

「今年も豊作だったきゅうりとかトマトとかの差し入れだよ」

確か穰子が近くに居ると農作物が豊作になるんだっけ。

「雛は何をしに？」

「鬼澤さんの用事で来たので私は付き添いです」

「なあ雛、普通に颯でいいぞ？さん付けとかもかったるいし」

「そうですか？私としては癖みたいな物なので颯さんと呼ばせていただきます」

癖を治せとか言われても困るだろうから俺は何も言わなかった。

てかちょっと図々しかっただろうか？

今日知り合ったばかりの奴相手に呼び捨てとか。

「へえ。そういえば射命丸が誰かを待っているみたいなのと言ってたけどもしかして君の事かな？」

「多分当たりだ」

さつさと用事済ませて幻想郷縁起見に行こう。

秋姉妹は河童達にもきゅうりを差し入れに行くらしく、2人揃ってどこかへ歩いて行った。

あの籠は野菜を入れていたのか。

雛と俺は良く掃除の行き届いた母屋に当たる建物へ行った。

「ごめんくださーい!!」

返事が無い、ただのsry

「本堂に居るのかな」

本堂へ向うと何故か障子の少し開いた場所があったので中を覗くと、黙祷する緑髪の巫女、目を瞑って何かを呟いている腰に巻いたしめ縄が特徴的な女性、大きな目玉が付いている帽子を被った小学生かと見紛う少女の姿があった。

「お取り込み中悪いんだが射命丸が来てないか？」

我が名は通称、エアクラッシュー W W W

空気も読まずに声を掛けてみた。

射命丸文からの取材

「文屋が待っているって言う外来人はあんたかい？」

返事をしてくれたのは洩矢諏訪子^{もりや すわこ}だった。

しめ縄を腰に巻いた女性^{なえ}、八坂神奈子^{やさか かなこ}と緑髪の巫女さん、東風谷早苗^{こうふうや なの}は完全に無視しやがった。

「一応そう言う事になってる」

「私は洩矢諏訪子、この神社に祭られている神さ。君は？」

「俺は鬼澤颯、ただの外来人だ。よろしく洩矢様」

俺が自己紹介的なものをするとう諏訪子は目を丸くした後、何故が大笑いし始めた。

可笑しなこと言ったか？

「いやぁ……ごめんね。颯君が真面目な顔で様付けなんかするから……つい可笑しくて……」

「いやいや、神様なんだからそこは自信持つとけよ！..」

「確かに様付けはされるけど名字で呼ばれたのは久方ぶりだからね」

「そうか。俺の事は好きに呼んでくれて構わない。で、文はどこに居るんだ？」

「文屋なら母屋に居るはずだけど……」

居なかったような……

もう一度探してみるか。

俺はその場を後にし、再び雛と母屋へと来た。

「さっきは居ないようでしたけど……」

「諏訪子の話によると母屋に居るらしいんだ」

玄関には靴が無く、かわりに下駄が置いてあった。

イラストだと下駄だったりするから合ってるのか？

「お邪魔します」

俺と雛は靴を脱ぎ、廊下を進みつつ台所、居間の順に覗くと居間に文が居た。

「あれ？随分早いですね。あそこから少し距離があると思っていたのですが……」

「瞬間移動つてやつだ。ワープとも言っ」

「へえ、ではでは早速インタビューさせていただきます」

そこからは文の質問タイムが始まった。

とは言ってもはたての質問に毛が生えた程度、大した事は聞かれなかった。

はたてと同じく15分程度で質問は終了した。

「どうしてこの程度の質問なのか？って顔ですね？」

くっ、確かにポーカーフェイスには自信が無いが露骨に顔の事言わ

れるとなんか妙に腹立たしいな。

「実は、既にあなたの情報は色々手に入れているんですよ」

「何故に？」

「壁に耳有り障子に目有り、ですよ。どこから情報と言ったものが漏れるかなんて誰にも想像は付かないものです」

夏祭り開催のお知らせ

文の言う事には一理ある。

俺の場合、幻想郷に来てから接触した人間なんて限られてるから大
体検討はつくが……。

「何はともあれ情報提供感謝します。お礼にしては難ですが今日人
里で夏祭りをやるそうなんですよ。そこでこれを貴方にあげます」

文が差し出してきたのは2枚のチケットのような紙切れ。

内容はプリズムリバー三姉妹によるライブの最前列の席が記された
入場チケットのようなものだった。

「いいのか？」

「どうぞどうぞ。ミスティアさんでもデートがてら行ってきて下
さい」

「なっ！？どうしてその事を！？」

「いやあ、しつかと聞きましたよ？いきなり出会い頭に『結婚してくれ！』ですからねえwww」

一番知られてはいけない奴に情報を握られたようだ。

もっと周囲に気を配るべきだったか……

「こ、このことは俺の沽券に関わる……出来れば穏便に事を運びたいわけだが……」

「へえ、そうなんですか。

鬼澤さんって子供好きのロリコンだったんですね」

と、そこで雛がイタズラっぽく笑いながら茶化してきた。

「くっ！！俺はロリコンじゃない！！他の子供には興味すら湧かないからな！！」

これは実際ウソになる。

事実、俺は押しに弱い性格だと自負している。ゆえにフランからのアプローチには紳士的な対応ができない。この場合のフランはさながら『ずっと欲しかった兄が出来た妹』としての甘え、だろうが。

優柔不断とも言うのかも知れんが……

「TK、この事はできるだけ他言無用で頼む。
俺はミステリアに嫌われたくない」

「まあ最初から記事にするつもりは有りませんでしたのでそこはご安心下さい。何せオフの時だったからカメラ持ってなかったんですよねえ」

「まあ安心して下さいよ。」

色恋沙汰の記事は意外と人気が低いんです。そんな公開処刑のような真似はしませんよ」

うむ、信じていいやら...

「ま、まあそうしてもらえると助かる」

「それでは私は用事があるので失礼します」

文はそう言って居間を出た。その直後に少し話し声が聞こえ、諏訪子、神奈子、早苗が居間にやってきた。

「何のもてなしもなくて悪かったね。結界の張り直しをしていたんだよ」

「今お茶を煎れてきますね」

神奈子と諏訪子は卓袱台を囲むようにして座り、俺と、さっきから何も話さない雛も腰を下ろした。

「はじめまして。私は八坂神奈子。一応神だ」

「射命丸から紹介が有ったかも知れないが、俺は鬼澤颯、外来人だ」

「うむ、よろしく」

「人里へ向かわなければ」

「ちょっと聞きたい事があるんだがいいかい？」

神奈子が俺に聞きたい事？

気になるな。

「内容にもよりけりだけど」

「いやなに、君が来る前の地球の状態を知りたいだけなんだけどね？何か変わった所は無かった？」

ふむ、変わった所と言えば温暖化程度だろうか。

「俺が知っているのは地球温暖化とオゾン層の破壊ぐらいっスね」

「地球温暖化にオゾン層破壊か………」

それを聞いて一体どうしようと言っのだろうか…？

「少し気になっていてね」

そこで早苗さんがお茶を煎れてきてくれたようだ。

「いただきます」

俺はお茶を飲みつつ、神奈子と幻想郷についてどの程度知っているのか等をしばらく話し、俺と雛は守矢神社を後にした。

雖は用事を思い出したらしく、ふわふわと飛んでいった。

「さてと、一通り用事も済んだしみすちーの家に行くか……」

幻想郷縁起はまあいつでも見れるし…

後でいいよな……

携帯にミステリアの家の前と入力し、転移した。

「…………留守のようだな……」

何故判ったかつて？

屋台が無いからだよ。

祭があるから先に人里へ行つたのかも知れない。

ドラえもんの四次元ポケット（携帯内蔵）から籠手、眼鏡を取り出し、装着する。

次いで空へ飛び立ち、千里眼で上空からミステリアを探すことにした。

「む？あれは……」

眼下に広がるのは木々の生い茂る雑木林のような風景。

木々の開けた草原のど真ん中に高さがおおよそ3メートルはあろうかと言っぐらいのバカでかい怪物がいた。

「な、なんじゃありや？」

見た目は人間の形をしてはいるものの、体色は黄土色、目はが一つしかなく、右手には銃刀法違反？ナニソレオイシイノ？的な感覚で刃渡りが50センチをゆうに越す薙刀が握られていた。

せめてもの救いは獣の毛皮をベースに作られた服を着ていた所ぐらいか。

一応恥じらいがあるらしい。

幸いにもこちらは上空。

地上からは100メートルは離れている。

当然気づかれてはいない。

「どうすっかなあ……」

明らか人里目指して歩いてるし…人を襲う確証は無いがあんな物騒な物持つてるし……」

とりあえず多少距離を取った位置に着地し、声を掛けてみた。

「あー、その道行く大きな方。そんな物騒な薙刀持ってどこに行くつもりなんですかね？」

戦闘力は800〜1500ですか、基準がわからない。

巨人はゆっくり振り返り、雄叫びをあげながらドシンドシンと突進してきた。

「面倒だなあ」

目の前に、物理的な衝撃全てを弾く魔法陣を組む。

そこへ巨人はバカ正直にリンクのジャンプ斬りよろしく、力任せに魔法陣へ薙刀を振り下ろしてきた。

「ぐおおう!？」

――が、薙刀が魔法陣に触れた瞬間、ビデオの逆再生のように巨人が後ろに吹き飛んだ。

「WWW」

「グウ　オオオ」

さて、殺すのは忍びないのでと。

「クククッ。空間干涉魔法陣展開!!」

巨人の足元に半径1メートル程の魔法陣が展開され、その巨体を一瞬で跡形もなく消した。

「さあて、仕事サボって寝てなきやいいが……」

所変わって紅魔館門前。

そこには門番の紅美鈴がウトウトしながら勤務していた。

「ううん……こんなにポカポカ陽気を当てるなんて………太陽は私に眠れと言っているのだろうか……」

と、そこへ今し方、颯と戦闘していた巨人が現れた。

「ぬおっ！！なんか出てきた！？」

その日門番は巨人（後で知ったが正式名称は一つ目男らしい）を倒し、珍しく門番の仕事をしたそう。

集団催眠現象

巨人を紅魔館門前へと強制転移させた俺は一直線に人里へ向かった。

道中にミステリアの姿は無かった。

「お？もう祭って雰囲気だな」

着地点は人里の3ヶ所あるうちの一つの出入り口にあたる場所。

見える限りでは提灯が並び、道には所狭しと屋台が並んでいる。

「いたいた。みすちー発見」

千里眼に人数など無意味なようだ。

あっさりと屋台で鰻を焼くミステリアを見つけられた。

しかしかなりの行列が出来ていて忙しそうだ。

俺は大群衆の波を華麗に避け、ミステリアの屋台の裏に回った。

「ようミステリア。手伝うぜ」

「あつ！颯さん…有り難いです」

流石に祭だけあってか尋常じゃない人妖の数だ。
俺は会計＋鰻の受け渡しを開始した。

鰻の量は次々に減り、20分程の激戦の末、見事に完売した。

「ふう。すげー人気だな」

「はは、ありがと」

まだ何人も並んでいたが完売の札を掲げると蜘蛛の子を散らしたように行列が消えた。

屋台の片付けを手伝い、ようやく全て片付いた。

「また手伝ってもらっちゃって……」

「気にするな。さてと、業務話はここまでだ」

俺は文から貰ったチケットを一枚ミスティアに差し出した。

「これは……プリズムリバー三姉妹のライブチケット？」

「どうだ？一緒に来てくれないか？」

「私なんかが一緒に行つて…いいの？」

「ああ。寧ろ一緒に行つてくれる方が俺にとっては……」

ふと視界の端に見覚えのあるヤツが映つた。

あ、眼鏡そのままだつた…

「射命丸か」

「あやや、バレましたか」

路地からこちらの様子をチラチラ伺っていた文が出てきた。

「俺が眼鏡を掛けている時は栲と同じ『千里先まで見通す程度の能力』を使える。以後、気を付けるんだな」

「ほう。これは良いことを聞きました。私は用事を思い出したのでここで失礼します」

「はなっから付いて来るつもりだったのか…」

文は瞬時に上空へ舞い、その姿を消した。

「さてと、邪魔者は居なくなっただし一緒に来てくれるかい？」

「うん！」

何故いつもミスティアは暗い雰囲気を纏っているのだろうか……

もしや人間自体がキライとかか？

兎にも角にも俺とミスティアはライブが行われるイベント会場のな

場所へ向かった。

会場入り口には3人の係員が居てチケットの整理をしている。俺とミスティアはチケットを係員に千切ってもらい、入場した。

会場に入ると何故か幽霊が沢山居た。と、言うよりは人魂と言った方が適切かも知れんが……

「すごい人（魂）数だな」

「そうだね」

幸いにもライブはまだ始まっておらず、数分後開始されるようだ。

そして待つこと数分。

お馴染みのトリオが現れた。

ライブが始まると同時に会場は物凄い熱気に覆われた。

「なんか凄く懐かしい気分だ……」

「元の世界に帰りたい？」

「全然……と言つより向こうで一度、俺は死んでるだろうから今更戻った所で知り合いは1人も居ないだろうし」

「親や友達俺のために涙を流してくれたのだろうか……？」

「だとしたらここでこうやってピンピンしているのが物凄くいけないことをしているような気になってきた。」

「ごめん……」

「いや、気にすんな。俺は過ぎた事はどうでもいい主義だから」

「しかし——」

音楽など聞いたのはとても昔のような気がして、少し懐かしかった。

そんな事を考えていると演奏が止まった。

それも曲の途中で。

何事かと思い、プリズムリバー三姉妹を見ると後部の座席に視線を固定させているのがわかる。

すぐに後ろを向くが暗くてよくわからない。

「え？あれ？なんでこんな場所に死神が……」

千里眼を使用して見ると、何人かの死神が次々に人間、妖怪、幽霊を手にした鎌で『殺している』姿が目映った。

その中には画面越しで見たことのある赤髪でツインテールっぽい髪型で浴衣を改造した服を着ていた小野塚小町おのすか こまちの姿もあった。

「な！？何やってんだよ！？」

「っ！！……だめっ！！」

籠手を装備し、出入り口付近へ飛ばうとすると、ミスティアに引き留められた。

「離せっ！！H A N A S E ……じゃなくて…見殺しにしろってのか！？」

「私が…何とかする」

ミスティアの目が一瞬、妖しく光った。

すると死神達の動きが急に鈍る。

「鳥目か！！ナイスだ！！暫くここで待っていてくれ！！」

俺は今度こそ飛び、この会場に居る死神全員の足元に転移魔法陣を敷き、会場の外へ転移させ、同時に俺も転移した。

「さて、言い訳を聞こうか。死神諸君？」

「……………」

全員が無言。だが、視点がはつきりしていない。

もしや催眠術か何かに操られているだけなのだろうか？

「クヒヒヒ、随分生意気な人間が居たもんだ。たかが人間1人にや

られるとは死神の名折れ、恥曝し共が」

声の方を向くと…

「四季・映姫・ヤマザナドゥ…」

「おやあ？何故宿主の事を知っている人間が居るのかなあ？確か巫女や魔女の情報しか入っていないが……」

そう言つて映姫は死神の1人を睨みつける。

「も、申し訳有りません」

「まあいい、こうして人里へ出向いたのもこういった力ある人間を見つけ出し支配するためだからな。今回は特別に許してやる」

「ハッ、有り難きお言葉」

何かに……操られているのか？

宿主とか言ってるし。

映姫の目に映らぬようこっそりと眼鏡を取り出し、見てみると……戦闘力がバラつきこそ有るが死神の平均値が40000、映姫に限っては99999とチート臭がプンプンする値だ。

「思念体の類か……」

「何？そこまで情報を持っていると言うことは……こやつ、イレギユラーなのではないか？」

「当たりか。その体を本人に帰す気、ない？」

「寝言は寝て言え。そう易々とこの逸材を手放すものか」

「じゃあ消えろ」

一瞬で自分の足元に瞬間移動用の魔法陣を展開し、映姫の背後へ転移し、頭を鷲掴みにした。

「何っ!？」

即座に『この体にある四季・映季・ヤマザナドゥ以外の構成要素全て』を念頭に分解を発動させた。

すると映季は力なく倒れそうになり、俺はそれを支えた。

「さて、回りの死神さんに宿ってる方々も速やかに体を破棄して逃げないところなるから。10数える」

刹那、一斉に死神達は意識を失い、その場に倒れた。

「うはwww脅しておいて言うのもなんだがテラ弱虫www」

異世界からの来訪者

死神達は全員意識を失って、辺りに倒れている。

「で、なんでお前だけ立ってんの？」

「純粹に、あたいは乗っ取られていなかった。それだけだよ」

乗っ取られていなかった？

じゃあ何で……ああ、山田さんには逆らえない立場だから否応無しに襲撃に荷担したのか。

「一応信じるよ。俺は鬼澤颯、外来人だ」

「あたいは小野塚小町、見てのとおり死神だ。今回は礼を言わせて欲しい」

「それは無用だな。俺は単純にミスティアを守りたかっただけだし」

「ミスティアを守る？もしかしてミスティアの彼氏か何か？」

「まだ彼氏じゃないな。

何でミスティア知ってるん？」

「たまに屋台へ飲みに行くからね」

「そうか。映季達を乗っ取っていた奴らって何がしたかったんだ？」

「映季様……いや、あの精神体達はこの幻想郷に居る『イレギュラー』を探して乗っ取ろうとしていた……幻想郷の言葉で言うあなたみたいな外来人ね」

なんでまたそんな事を……

「ちょうど一週間位前だったか、たまたまあたりは木陰でサボツ……休憩してた時に黒い霧が出てきてね。まるで生きてるかのよう

に蠢いて三途の川の向こう側に飛んでったんだ」

「黒い霧か……」

「それであたいが映季様に報告しようとしたら取り付かれていたんだ。でもあれは霊体じゃなかった、それだけは言える」

ふむ………なんだろ、この異変フラグ。

回収しなきゃ駄目かなあ。

「俺の方でも探りを入れてみる。他に何か特徴はなかったか？」

「他かあ………なんか異界の扉がどうのこうのって話してたけど何の事やら……」

異界の扉………もしか別の世界から来たとか？

奴らを逃がしたのはミスだったか……

「あ、いたいた！君大丈夫？単身特攻してたけど……」

「ああ、事態は収束した。この死神達は得体の知れない何かに操られていた」

声を掛けてきたのはメルラン・プリズムリバー。

確かメルランの音を聴いてるとハイになるんだよね……

「操られていたって……妖術の類かな？」

「いんや、精神体の類な」

そこヘルナサ、リリカ、ミスティアの3人が飛んできた。

「大丈夫!？」

「大丈夫だ、問題な――」

「あの死神達は？」

いや、言わせろよ。

「精神体に操られていただけだった。今はもう大丈夫だと思う」

――と、そこへさらに騒ぎを聞きつけてか2人の女性が飛んできた。

「これは一体何があったんだ!？」

「死神達が精神体に操られていただけだ。今は意識がないようだが」

「ん？君は？」

「失礼、俺は鬼澤颯。初めまして」

「私はここ人里で教師兼自警団の統率をしている上白沢慧音だ。よろしく」

「とりあえずは問題解決したし、再発もしないだろうから祭り中止とかしないでもらえないかな。
何かあったら可能な限り俺も手を貸すんで」

「根拠は？」

「俺が多数の精神体に逃げないと消すと言って脅しを掛けた。んで一目散に逃げたから仮に復讐しに来ても俺しか狙わないだろ」

あいつらの目的は恐らくは外来人を乗っ取るか殺すか。

しかし明確に乗り移る手段が判っていないのが唯一の心配だな。

黒い霧は危険っぽいが……

俺はその後、ミスティアと祭りを楽しみつつ問題を起こした妖怪の取締等を手伝った。

〵〵SideChange―八雲紫〵〵

「おい！！話が違っちゃないか八雲紫！！この幻想郷には精神体に対抗できる者はあんた以外に居ない筈じゃなかったのか！？」

「ええ。あなた達に対抗できる『者』は私以外存在しないわよ？」

「四季映姫を乗っ取っていた統領が外来人に消された。これをどう説明する！！」

「簡単よ、対抗できる『者』は居なくても『物』が存在した、只それだけの事よ」

「はあ？何を言って——」

「でもあなた達はもう用済み。消えて良いわ」

「貴様裏切っ——」

私は喧しい精神体どもの境界を弄り、存在を消した。

なかなか面白いわ。

『鬼澤颯』君♪

蠢く影（前書き）

テスト期間が終わって漸く更新でけた……

PSS3 掛かってたら誰だって勉強するよね orz

また亀更新ですが今後ともよろしくお願いいたしますm（
m（
（

蠢く影

Side Change―鬼澤颯―

結局あのあと精神体、黒い霧共々姿を現さず、無事に祭りは終了した。

それと意識が戻った死神に意識を手放す前の最後の記憶を聞いた所、やはり記憶が欠落していた。

ただ黒い霧によって記憶が途絶えたのは間違いないようだ。

「なんか……色々あって遊んだ気になれないぜ……」

「そう？ 私は楽しかったけど……」

屋台を押しながらミスティアの家へ向かう。

「ねえ」

「ん？」

「その……明日って何か用事ある？」

「いや。特に無い」

「明日の昼に大ちゃん達と一緒に遊ぶ予定なんだけど……よかったら来てくれない？」

「いいよ」

俺はロリコンでは無いが大妖精やチルノ達と遊ぶのも悪くない。

俺はロリコンでは無いが！！

大事な事なので（ry

ミスティアを家まで送り、俺は紅魔館に戻った。

「……………」

「……………」

現在位置は紅魔館の門の前。

そこには立ったまま寝ている美鈴の姿とどうやって悪戯してやろうか思案顔の俺の姿があった。

よし、くすぐり作戦でイコーか。

物音を立てずに美鈴の背後へ回り、首もとを軽く撫でた。

「ふみゃあ!？」

2、3秒やると猫ともつかない鳴き声で美鈴は目を覚ました。

「な、何しゆるんですか!？」

「クツクツクｗｗｗｗ」

デコピンもらいましたよ。

それも気を纏ったなかなか痛い奴。

「いってえな……せつかく咲夜さんに黙っていてあげようかと思っ
たのにどうしようかなあ……」

「す、すみませんでしたっ！！
でも寝ている女性の首筋を撫でるなんてデリカシーが足りませんよ
？」

「いやあ、すまんすまん。ま、起こしてあげたんだからいいだろ？
大声出して咲夜さんに気付かれるよりは」

「むう、今度は許しませんからね？」

「いやもう寝るなよ…」

美鈴に軽く会釈し、俺が館内に入ると妖精メイドの一人が寄ってきた。

「おぜ……………お嬢様がお待ちです、ホールへお急ぎ下さいです」

「ぶふう！？今おぜうって言い掛けたよね！？」

「う、ご冗談を。アハハハ」

聞かなかった事にしよう、そうしよう。

俺はいい加減覚えた道のりでホールへと向かった。

「遅いつー!!」

「いやあ、サ→セン←」

ホールへ入るなり第一声がそれ。俺が応答した直後に走る腹部への衝撃は最早テンプレ。

「ねえ様の言うとおり遅いよ!？」

「わ、わかったからどいてくれ………苦しい」

失念していた……完全な不意打ちだ……口に胃液が昇って来やがった……

「一つ聞きたいんだけどいいかしら？」

「なんだ？」

「咲夜、カゴを持ってきなさい」

「畏まりました」

一瞬咲夜が消え、再び現れたと同時に高さ2メートル、縦横幅が1、5メートル程度の箱状の鉄格子に囲まれた見覚えのある少女が出現した。

「姫海棠！？なんでオリなんかに！？」

その少女は姫海棠はたてだった。

しかも何故か猿轡に両手拘束に目隠しが施されており、パツと見た感じ誘拐にしか見えない。

「どうやら合っていたようね。で、どうやったら連絡が取れるの？」

「と、とりあえず誘拐は良くないから解放してあげてくれ……話はそれから……」

「仕方ないわね、咲夜」

「わかりました」

一瞬ではたてを囲んでいた檻、拘束していた縄、猿轡、目を隠していた布が消える。

「ガクブルガクブル」

いやまあトラウマってるであろう予想はしていたがなにされたんだ
……？

気になるようなならないような……

「気になります？」

「読心術！？ どんだけ万能なんだよ咲夜さん……」

「……は誰？ 私はドコ？」

「ちょ……マジで大丈夫か姫海棠」

「あ、鬼澤さん……」

ようやく周りの事が頭に入ってきたのか、はたては辺りを見回してからブツブツと呟きだした。

「確か妖怪の山に帰る途中に後ろからいきなり薬臭がされて……気付いたら目が見えなくて動けなくて……」

「解放したわよ、早く連絡手段を教えなさい」

「ああ、姫海棠、携帯を貸してもらえないか？」

俺は姫海棠から携帯を受け取った。

「そうだな、定期連絡でも入れるか。こうしよう、2日に一度、この携帯に連絡を入れる。電話って言って遠く離れている相手と会話するための機能なんだ」

「成る程、要はその携帯をソイツから奪って持っておけば良いのね？」

「最後まで聞け。俺は敢えて携帯の操作方法是教えない」

「何故？」

「それをしたら姫海棠を介した意味が無くなるだろう？それに携帯はかなり重要な役割を果たす時がある」

「あくまでその天狗を介して連絡を取りたいと？」

「とどのつまりそう言う事だな」

流石に他人の所有物を奪ってまで連絡を取りたいとは思わない。

いくら約束と言えど姫海棠にとってかなり酷だろう。

念写も出来ないだろうし。

「残された時間は少ない。」

「一応他の手段も模索するが今回はそれで勘弁してくれ」

「まああんたがそう言うなら仕方ないわね」

レミリアはやれやれと言った様子で肩を竦めた。

その後姫海棠は解放され、俺は夕食を頂き、なんのイベントも無く風呂に入り、そして自室（仮）へ戻った訳だが……

「まあ予想の範囲内だからそこまで驚かないけど……」

明らかに部屋の中に誰か居る気配がする。

「また部屋に入ったのかフラン、遊ぶなら明日に――」

「ごきげんよう、鬼澤君」

しかし部屋の中に居たのは俺の予想に反し、八雲紫だった――

八雲紫の思惑

。

「なるほど、大方話は理解したがわざわざあそこまでする必要はあったのか？」

紫の見込み違いだったら俺間違はなく死んでたよね？」

部屋に入ると紫に話があると言われ、聞くと先の一件の精神体どもを別の世界線からひっぱってきたのは他でもなく紫らしい。

どうやらワザと俺を襲うように仕向けたらしい。

「私が気になったのは貴方の能力よ。3つも持ってるし」

「俺の能力？」

「そう。貴方は気付いてないかもしれないけど、『正と負を操る程度の能力』、『ありとあらゆる事象を吸収できる程度の能力』、そして三つ目が――」

『世界に愛される程度の能力』

「は？前者の2つはいいとして最後の何？」

世界から愛されるってなんだ？
擬人化でもしてくれるん？

「最初私もそう思ってね。興味本位でその能力の性質を知りたいと思ったのよ」

「てか俺のデフォスペックに3つも能力があつたんだ……」

「結論だけ言うわ。おそらくその能力は貴方の望まない事が起こらなくなるような能力だと推測したわ」

「それってある種レミリアと同じ能力じゃん」

「まあ確かに運命を規定できる点はそうかもしれないけど残念ながらそうもいかないと思うわ」

「なんでだ？」

「世界は貴方の望まない形で貴方の望みを叶える可能性があるという点よ」

望まない事を起こさないのに望まない形で叶える？

意味が分らん……

「例えばそうね、貴方が誰かに殺されそうとき貴方が生きたいと望むとする。

すると世界は殺人者を止めるのではなく殺人者を殺す事でその望み

を叶えるかも知れない」

「つまりその状況下で俺が生きたいと望むと俺のせいで誰かが死ぬと？」

「あくまで物の例え、ただどね。可能性は0じゃない」

これは……神の魔改造デバイス要らなかったんじゃないか？

しかし言わないと気付けない能力だな……

「まあ気を付けなさい。

余計な望みを強く願わない事ね。

でないと周りに迷惑が掛かりそうだし」

「みたいだな」

しかし実感が湧かない……

てか正と負を操る程度の能力って何だよ……

「その能力の検証は貴方自身がやらないといけないわね。私には判らないし」

正と負か……

+と-であってんのかなあ……数学なんて興味無いのに……

（悪いけどまだまだ貴方には動いてもらっわよ。
その能力、存分に発揮しなさい）

その後紫はすぐに家へ帰った。
なんつーか自由な奴だ。

「さあてと、眠くないけど寝るか」

結局能力は判らず、他にやることも無いので寝る俺だった。

弾幕鬼ごっこ 前編

翌日の約12時頃、俺はレミリアに許可を得、ミスティアの家へと向かった。

「ミスティアく？居るか？」

返事が無い、ただの（ry

ふむ、もう湖畔に行ったのかな？

湖畔までそれほど距離が無かったので俺は歩いて湖畔まで向かった。

「お？大方揃ってるな」

湖畔付近の雑木林からミスティア、大妖精、チルノ、ルーミア、リグルの姿が確認できた。

「おおーい」

「ムッ！？アイツは……」

「おはよーなのだ」

「いやいや、もう『こんにちは』だろ時間的に」

「そーなのかー？ならこんにちワンなのだ」

「ごぶつwwルーミア、もう挨拶ネタは古いからー!!」

「そーなのかー」

てかどこで覚えたんだよ!？

なんなの？

TV持ってるの！？

「そついやリグルとは初対面だったな、俺は鬼澤颯、ただの外来n
——」

「気を付けて！——こいつ、ただの『れいぷま』だから」

レイプ魔！？

何故そうなった！？

「ちょ、チルノ何言ってるやがる、俺はそんなヤツじゃあ断じてねえ」

「嘘だつ——この間あたいのことおかそうとしたもん——！」

「アホか——！お前が蛙を氷付けにしてたから羽交い締めにして止め

「たんだろっが!!」

「よ、よろしく鬼澤さん……」

「誤解だ!! だからそんな汚物を見るような視線を向けるなリゲル!!」

「なんで名前知ってるの?」

グッ……痛いところ突きやがって……

「原作知識です(笑)」

「原作知識?」

「あゝ、幻想郷縁起で知ったって言えば解るか?」

「ああ、成る程ね」

「で、今日は何をするんだ？」

「よくぞ聞いてくれた!!」

今日は『弾幕鬼ごっこ』をやるのよ!!」

無い胸を逸らしてチルノが威張る。

「何だ弾幕鬼ごっこって？弾幕ごっこなら判るが……」

「んっふっふ、簡単に言えば――」

ルールはこうだ。

鬼となった者が逃げ回る者に弾幕を張り、弾に命中した者が鬼となる。

但し鬼になれるのは3度まで。

4回目の鬼となった者が敗北となり、罰ゲームを受けるそうだ。

そして鬼以外の者同士で弾幕をぶつけ合って被弾した場合、鬼になれる回数が減少し、0になった場合も敗北となる。

要は全員が敵だが協力して鬼を潰すことも出来るわけだ。

「それじゃー弾幕鬼ごっこを開始するわ!」

「鬼は?」

「あんたがやりなさい、鬼澤颯!!せめてものハンデよ」

「何故にハンデ?」

「最初の鬼は回数にカウントされないんですよ」

成る程な。

駄菓子菓子、それはそれで協力出来ない気が……

「んじゃ鬼は100数えてから動いてね………始めっ!!」

刹那、突風が俺の周囲を突き抜けた。

訂正、チルノ達が一斉に散った風だった――

弾幕鬼ごっこ 後編

「98…99…100!! 数え終わったのは良いんだが、これじゃあかくれんぼだよな……」

辺りの木陰には人の気配すらない。

「さてはてどこに隠れたんだ? ……っ! ?」

辺りをキョロキョロしていると、どこからか音もなく弾幕が迫ってきていた。

距離は50m程度で速度は人が歩く速度と大差無い。だが――

「ありや完全にホーミング弾だな、逐一向き補正してやがる」

飛んできている弾幕はカクカクと揺れながら俺目掛けてゆっくりと進んでいる。

弾幕の見た目からしてミスティアやチルノの弾じゃない。とすると大妖精かりグルが撃ってきている。

回避できないとわかったらやることは一つ、受けるか撃墜するかだ。

俺は籠手、眼鏡、ネックレスを装着し弾幕で正確にホーミング弾を撃ち、相殺した。

「うゝむ、弾幕の出元がわかればなあ……」

とりあえず千里眼で辺りを見回す。

「ほう、この弾幕はルーミアだったか。なら攻守交代だ」

一直線にルーミアが居る木陰との距離を詰める。が――

「あぶねっ――!!」

横から大量の氷塊が飛んできた。

慌てて高度上昇し、回避する。

「ちっ――ハズしたか……ルーミア!! 逃げよ――!!」

「そーなのか――」

チルノとルーミアは協調してるのか……面倒な……

その場からふわふわと浮かびながら離れるルーミアとチルノ。

「やられっぱなしは御免だぜ!!」

すかさず二人の背中に向けて5段階角度調整ができる擬似的なホーミング弾を放つ。

「あいたっ!!」

「よっしゃああ!!」

逃げるチルノの背中に擬似ホーミング弾が命中したのを確認し、俺は一目散に逃げた。

「ちっ、待ちやがれー!!」

すかさず踵を返し、追ってくるチルノ。

だが――

「ごめんなのだ」

「ルーミア!？」

ルーミアがチルノ目掛けて弾を打ち始めた。

鬼を狙うようにプログラミングでもされていたのだろうか……

そしてここに来て漸く『意思の疎通』が役に立った。

『人間から見て5時の方向から虫が狙っているぞ』

木々がそう教えてくれた。

言われた通り5時の方向を千里眼で見透かす。

(え！？見つかった！？)

運の悪いことに、リグルは一発しか放てない上に溜時間の長い弾だが、初速、弾速に特化し、角度補正も少し出来る弾を溜めている真っ最中だった。

「てりゃあー!!」

そんなリグルに向け、俺は速度重視の光弾を複数放つ。

だがホーミング性能が無く真っ直ぐにリグルへ飛んでいった光弾は簡単によけられるだろう。

餅のロンでフェイクだがな。俺は光弾に隠すようにホーミング弾を放った。

（直進する弾？こんなの簡単に避けれ——っ！？）

案の定リグルは光弾をスレスレで避けようとし、光弾の後ろにあるホーミング弾の接近を許してしまった。

「うわっ！？」

どうにか対応し何発か相殺したようだが一発だけヒットしたようだ。

「今の内に逃げるのが吉だな」

ヒットアンドアウェイとは正にこの事か。

リグルが後続の光弾に気を取られている隙に俺は木々の間を縫うようにして逃げた。

「やってくれるじゃないか……っってもう居ない……」

颯とリグルが相対している間、チルノとルミアの戦いも一段落付いていた。

「逃げられたのだ」

チルノは湖の上にルーミアを誘導し、うまく霧に乗じて逃げたようだ。

一方でリグルは颯の搜索をしていた。

「うーん、見つからないかあ」

自慢の虫を駆使し、颯を探すがなかなか見つけれない。

（しかし何だろう…虫達が何か隠しているような……）

それもそのはずである。

颯はリグルの能力を知っているからか、意思の疎通を使って虫達に口止めを行っていたのだ。

「あれ？リグルちゃん？」

「ん？ああ、大ちゃんか」

「あれ！？リグルちゃんが被弾するなんて珍しいね？」

「ちょっとあの外来人にね。意外にもキレるヤツだったからしくじっちゃったんだ」

「あ…そ、そうなんだ…」

何か後ろめたそうに視線を逸らした大妖精。

「どうかした？」

「えと…まああの人の事が少し気になって…」

「はあ？それってもしかして……惚れた？」

「いつ、いやっ！！そういう意味じゃなくて！！なんていうか……あの
人から吸血鬼の感じがして……」

「ああそれね。私も気付いてたけど確か紅魔館の執事やってるんで
しょ？その感じをまとってるんじゃないかな」

「やっぱりそう…かな」

「取り敢えず本人も外来人って言ってたんだしそうなんじゃないか
な。」

流石に外界に吸血鬼はもういないだろうからね」

「確かに……」

「それはそうとこれからどうする？」

「チルノちゃんはまだいいけどルーミアちゃんは結構危ないから逃
げようよ」

「ん、そうだね」

「わは、だれから逃げるのだ？」

二人の背後からルーミアが声を掛けた。

バツと勢い良く振り返るとそこには闇を纏ったルーミアの姿があった。

「隙ありなのだ！」

ルーミアは大妖精とリグルが臨戦態勢になる前に弾幕を連発した。

狙いは完全にリグルだった。

恐らくは一度被弾して残機の少ないリグルを沈めるためなのだろう。

（ああ、罰ゲーム決定か…）

リグルは衝撃に備え受け身の型をとりながら目を瞑った。

しかし——来るべき弾幕はリグルに接触することはなかった。

「…な…んで…?」

「あちゃー、一発被弾かあゝ。しくじったな」

リグルの目の前には籠手を構えた颯の姿があった。

「大妖精、俺の後ろに居てくれ。ルーミアの相手は俺がやる」

「そーなのかー」

クックック、ルーミアには一番最初に狙撃された借りを返してないからなあ……

「あんたのこと狙ったのに助けるの？」

「なんだ？不満かりグル」

「だ、だって……」

「ルーミアに借りを返す前にゲーム終了は気に食わないんでなあ」

「……え？」

「待っていてありがとルーミア。それとも戦略を練ってたかな？」

「なんの事なのだ？」

「まあこの際どうでもいいや、それじゃ戦闘開し——」

「うわあああああ！……！」

あれ？なんか？の断末魔の叫びが……

「そこの二人、ゲーム終了だよ！今回はチルノの負け！」

「み、みすちー？」

「ちょっと残念なのだ」

その後聞いた話だとルミアがリグル達に奇襲を掛けるちょっと前

に霧から出て来たチルノをミスティアが発見し、トドメを差したら
しい。

チルノの罰ゲーム

「この借りはいつか返すぜルーミア」

「望むところなのだ」

因みに罰ゲームはと言うと負けた人以外の誰かが決めらしい。

「よかったあ、この間は散々な目に遭ったし……」

「前はは大妖精が負けたのか？」

「はい。ルーミアちゃんにやられて……」

「その時の罰ゲームは酷かったなあ。確かチルノ発案の紅魔館の主の下着を盗んでくる、だったっけ？」

「はああ!？」

「うん。ほんと散々な目に遭ったよ……どうにか妖精メイドから逃げたのはいいけど下着を手に入れてから鼻血を垂らしたメイドに追い回されて……しかも罰ゲームは絶対だから逆らえないし……」

あ、咲夜さんね。

と言うかコレは……

「なあ、今回の罰ゲーム、俺が決めていいか？」

「え？駄目とは言わないけど……」

「なら、この鬼澤颯が敗北者チルノに命ずる！！」

「あ、エッチなのは駄目だからね」

下着泥棒も充分エッチだろ……

「以後、この弾幕鬼ごっこを開催することを禁ずる！..」

.....。

「ああ、その手があったか」

「ようやくこの地獄から解放される.....」

「ええ！？そんなのズルいよ！..」

「クケケ、罰ゲームは絶対なんだろチルノ？」

「ぐぬぬ.....」

わお、チルノのぐぬぬとかw
まぢ役得ですわ〜w

その後チルノと多少揉めて、しばらく話をしたあと解散になった。

「ねえ大ちゃん」

「なあに？リグルちゃん」

「私、惚れたかも」

「え？ええ！？あの鬼澤さんに！？」

「うん。いや、なんかさ、男らしいっていうか…それに攻撃した私の事庇ってくれたし…」

「でもあれはルーミアちゃんに……」

「うん、そうだけどさ」

大妖精とリグルの帰り道、こんな会話があつたことを颯は知らない。
――。

弾幕鬼ごっこ その後

「あ、鬼澤さん。お帰りなさい」

「おう美鈴。門番頑張れよ」

弾幕鬼ごっこを無事終え、紅魔館へと戻った俺は真っ先に風呂へ向かった。

「ふう、やはり風呂は日本人の文化や……」

大浴槽に浸かりながらしみじみ思う。

因みに今日は先日の失態を踏まえ、あらかじめ誰も居ないことを確認してから入った。

そして夕食の席にはフランは居らず、何故かレミリアから品定めす

るような意味深な視線を送られながら食事を済ませ、俺は自室に戻った。

明日はなにをして過ごすのか……

そんな事を考えながらゴロゴロしていると、いつの間にか俺は意識を手放していた――。

第一能力開花

翌朝――

「……………」。

「すう……………すう……………」

おかしいな、寝ぼけてるのかなあ…………

なんかフランがそばで寝ている幻覚が…………

「あの、快眠中済まないんだが」

「ふえ？あ、おはよ……………」

目を覚ましたフランは小さな欠伸を一つし、キョトンと俺を見ている。

「いやあの何で俺の部屋で寝てるんですか？」

「ん？なんとなく」

なんとなく、じゃねえよ！！

てか一応施錠して寝た筈だが――

ああ、見事にドアが消えてますね。

「助けて咲夜さ〜ん！！！！！！」

大声で咲夜さんと呼ぶ。

数秒のラグがあつてから、

「どうかし……まあ、兄妹で仲が良いこと／＼」

「違う違う、勝手にフランが強行突破したんだ！！ドア破壊して」

「あら？本当ですね。

今日中に直させますね」

そう言うと言い返す暇もなく咲夜さんは姿を消した。

理不尽ってこういうことを言っただな。

「もしかしてフランのことイヤだった？」

「ああ、イヤだった」

嘘も方便と言うのもこのことだろう。

が、そのセリフを言った瞬間フランがうるうるしながら俺を上目遣いで見つめてきた。

くっ、なんという破壊力…

「あゝ、今度からはフランの部屋で寝ような。俺の部屋はクサいし汚いから」

あ、あくまで寝かしつけるだけね。
そこ勘違いしない。

ついでに言うと俺の部屋は臭くも汚くも無いけどね。

「臭くも汚くも無いと思うけど……まあいいや。約束ね?」

それだけ言つとフランは俺の部屋を出て行った。

「朝から騒々しい……」

そして二度寝を決め込む俺だった……

次に目を覚ましたのは予想外な奴からの予想外な攻撃だった。

「——さい」

「……………」

「鬼澤さ——て下さい」

「……………」

「こっぴなつたら――」

直後、体に電流でも流れたんじゃないかと思つほどに体が痺れた。

「あばばば……なつ、何しやがる!!」

「やっと起きましたか。お嬢様がお呼びですよ?」

「お前俺に何をした?」

「いやなに、神経にチヨロツと氣を流しただけですよ」

だからあんなビリビリ痺れたのか。納得。

「ん?電流?」

「どうかしました？もしかして気を流しすぎましたか！？」

「まで、確か落雷って雲の中に摩擦によって生じた負の電子が地表の正の電子に引き寄せられて発生するんじゃないかったか？」

「なんですか急に…頭大丈夫ですか！？記憶有ります！？」

美鈴がまくし立てるが今は耳に入らない。

「ごめん、レミリアには後で会うから先にパチュリーの所行ってくる…！」

「えっ？ちょ、待って下さ——」

俺は美鈴の制止を無視して図書館へ転移した。

「きゃっ!!」

「のわっ!!」

しかし転移先に何故か小悪魔が居て互いにぶつかり合い、尻餅を着いてしまった。

「一体なんなん……うわっ!! 変態さんだ!!」

「悪い小悪魔、パチユリー居るか？」

土埃を払いながら尋ねた。

「パチュリー様ならこの通路の奥に居ますけど…」

「ありがとう」

俺は足早にパチュリーが居る場所へ向かった。

「あら、おはよう。何か用かしら？」

「落雷の仕組みってわかるか？」

「落雷？確か雲中の氷粒子がぶつかり合う摩擦で雲中の上の方に正電荷、下の方に負電荷が集まって地表の正電荷に雲中の負電荷が誘導されて起きる、そんなだったわね。
でもそれがどうしたの？」

当たってたか。

てことは俺の能力は雷を発現出来る能力だったんだ。

試しに右手に正電荷、左手に負電荷を集める。

と言っでもなんとなく念じたただけだが。

「おおっ!!」

すると両手間でバチバチと青白い火花が飛ぶ。

「いててっ、こりゃ扱いに注意が要るな」

「それあなたの能力？」

「そ。『正と負を操る程度の能力』だ」

「ふうん。てことは何でも出来るんじゃないかしら？」

「なんでも？」

「例えばだけど磁界を操ったり、素粒子に負の力を与えて物体を破壊したりとか」

あれ？なんか主人公補正が働いてね？

チートだろwww

「ただまあいきなりそんな事したら体が保たないでしょうね」

「そうかもな。まっ、地道に努力するさ」

それから暫くパチュリーの思い付いた正と負関連で出来そうなことをひとしきり聞いた後、広間へ徒歩で向かった。

「やっと来たわね？レディを待たせるなんて紳士としてどうなのよ」

「いやなに、能力が開花したもんで」

「へえ。どんな能力？」

「『正と負を操る程度の能力』だ。例えば雷を発生させたりできる」

「へえ、なんか強そうな能力だね」

フランが無邪気に笑う。

それに対しレミリアは考え事をしているようだ。

「それ、かなり使い道が有るんじゃない？」

「ああ、パチュリー曰わく時間にも干渉できるそうだ」

時間を負に働かせる。

つまり時が戻る事になる。

負の使い道が尋常じゃない。

「まあ能力はいいわ。今日はちょっと頼み事が有ってね」

「頼み事？」

「そうよ、フラン」

「実はね、人里に遊びに連れて行って欲しいの」

「人里にか。まあ構わないが……………」

「やった!!」

うゝむ、しかし何かイヤな予感がする……

人里での一騒動

「準備できたのか？」

「うん！」

現在紅魔館の正面玄関に居る。

そして目の前には朝練（？）をしている美鈴と何時もと違い、赤いワンピースを着たフランの姿があった。

「じゃ行くか」

幸いにも天気はくもり。
何か作為的な物を感じる天気だが……

一応日傘も持たされているが持ち歩くのがダルいので携帯にしまっている。

「でも何で徒歩がいいんだ？瞬間移動ならあつと言つ間だぞ？」

「それじゃあデートにならないでしょ？」

「それもそうだ………つてデート！？」

「あ、これ内緒にしなきゃいけないんだっけ……」

ああ、レミリアは端っからコレが狙いか。

「カッチーン。」

仕組まれていると知ったら無性に腹が立ってきた」

携帯から眼鏡を取り出し、装着する。

「対象、紅魔館全域で多重不貫結界を発動」

恐らくレミリア、咲夜辺りがストーキングしてくるだろう。

だが悪いな、紅魔館は封鎖した。俺が帰ってくるまで出れず入れず、だ。

「なにしたの？」

「悪い虫が寄ってこないようにおまじないを掛けたのさ」

暫く歩くとお馴染みの湖に辿り着いた。

「これって湖？」

「見るのは初めてか？」

「本でしか見たことなかった。外に出るのも今日が初めてだし」

なるほど、レミリアはなかなかの大役を押し付けてくれたな。

「ああー！！れいぷ魔だああー！！」

声のした方向を見ると、チルノが俺を指差しながら睨んでいた。

「また小さい子をだまくらかして犯そうとしてる！！
そこの子！！ソイツはじゅーどのヘンタイだから気を付けて！！」

「まてまてまて！！俺は犯そうとなんてしてないし犯したこともない！！」

そこへチルノの大声を聞きつけた大妖精、リグルがやってきた。

「チルノちゃん、あの人はそんな事するような人じゃないよ？この間ミスティアちゃんも言ってたじゃない？」

「でもあたいを犯そうとしたよ？」

「してないっつの！！」

「ねえお兄ちゃん？あの頭が弱そうな妖精は知り合いなの？」

「一応」

フランはチルノを指差しながら尋ねてきた。

てか頭が弱そう、じゃなくて頭が弱い、が正確なんだがな（笑）

「あたいは最強だから頭も強いんだよ。弱いところなんてあるわけ……」

「- 1 + 5 は？」

「ま、まいなす？」

「4 でしょ？」

「4 ですね」

「4 だろうね」

上からチルノ、フラン、大妖精、リグルの順だが言わずともわかる

だらうな W W W

「よ、4ね!!当然ね」

一同

「……………」

「な、何よみんなしてその冷たい眼差しは!!ムカつく!!」

さり気なく氷の弾幕を幾つか飛ばしてきたが結界を張って弾く。

「おお!!結界をいきなり張れるなんてすごいね」

「はは、俺は大した力は持つとらんよ。それよりフラン、さっさと人里に行かないか?若干面倒なヤツが一名いるからさ」

「そうだね、頭が悪い妖精が一体居るもんね」

フランさん、もしや素のリアクションですか！？で、出来る！！

フラン…恐ろしい子……

「人里に行くんですか？」

「まあね。フランたつての希望だから断る訳にも——」

「だったらあたい達も連れて行きなさいぐみん」

そこへさっきまで飛ばしていた氷弾の手を止め、何故か無い胸を張って愚民呼ばわりしてくる？。

「リグルと大妖精ならok。チルノは直ぐ騒ぎを起こすタイプだからダメゼッタイ」

「え！？なんであたいが駄目なのさ！？」

「いや、チルノは……ねえ？」

「ぐぬぬ……」

ブハッwwwチルノのぐぬぬとかwww俺得www

「いや、まあ、うん、人間に危害加えなきゃ連れて行かないでもない
」

「その位わかってるよ。」

紅白とか変身するとキモいのか居るし」

「慧音が聞いたらヘッドバット確定ゼリフだな」

何故か見た目幼女4人に囲まれて人里へ行くことになりました。

俺…ロリコンじゃないのに……これって一応約得？

それからことある事にチルノが騒いだのはご愛嬌。

「ようやく着いたか。

はあ……なんかドツと疲れた…。大妖精、心中お察し致します」

「あはは……もう慣れましたけどね……」

チルノのお守りは物凄く大変だ、大妖精の苦勞が身にしてみて分かったぜ……

「ここが人里……うわあ、たくさん人間が居るよ……」

「怖いかならん？」

「うん…ちょっと怖いけど…大丈夫だよ」

うむ、来たはいいがどこに連れて行けばいいんだろう……

「ちょっとお腹が減ったな………」

どうやら妹様は空腹なようで……

「それじゃ、みんな団子屋にでも入らないか？」

俺は直ぐそばにある団子屋を指差し、一同に問い掛けた。

子供で女の子しか居ないわけだから甘いものには目が無いはず……

「いぎなーし」

「いいですよ？」

「奢りなら」

「興味ある！！」

上からチルノ、大妖精、リグル、フラン。予想通りの返事が帰ってきた。

団子屋には白黒と妹紅が居た。
何という偶然。

「お？結界師じゃないか」

「なんだそのあだ名は？」

「うわゝ、何故そんなにゾロゾロと連れてるんだ？」

「フラン以外は途中で連れて行く羽目になったただけだ」

空いている席に全員座り、好きな注文をするように促す。

因みに俺は抹茶のみ注文した。

「で、魔理沙と妹紅はここで何してんだ？」

「買い出しと妹紅にちよいと聞きたい事があつたんでな」

「そうか…」

「もぐもぐ……これ美味しいね」

「ちゃんと味わって食べよ？」

女子集団はご満悦の様子だ。

「なあ颯」

「なんだ？」

「お前ってスペカ持ってるか？」

「素なら有るが作ってないな」

「なら今すぐ作って私と弾幕ごっこしないか？」

「良いぜ！一応案は有ったんだが作る時間が無くってな」

俺はスペカの素を2枚取り出し、スペルを完成させた。

「早速やろうぜ？」

「ああ。―とその前に、大妖精」

「はい、なんですか？」

俺は大妖精に封筒を寄越した。

「もし俺が戻る前に食べ終わったらその封筒の中の金を払って
くれ」

「わ、わかりましたけど何で私なんですか？」

「んー、一番信用できるから、かな」

それだけ言って魔理沙と外に出、人里から少し離れた雑木林に着く。

「んじゃルール確認な、スペカは2枚で残機3。これでいいか？」

「わかった」

互いに距離を取り、弾幕ごっこを開始した。

「先手必勝！！スペルカード発動！！恋符『マスタースパーク』！
」

「予想通りだな。スペルカード発動、心符『精神統一』」

新たに作ったスペルカード、『精神統一』は発動後に発動するスペルの精神疲労を大幅に下げ、精神を増強するだけの効果。だが――

「さて、能力でどうかしますか」

目前まで迫った極太レーザーに対し、俺は『正と負を操る程度の能力』で、レーザーに掛かる重力の正の力を過剰作動させる。

重力の正は引かれる力、負は抵抗する力。

その正を増幅させるわけだから……

「何！？マスタースパークが下を向いた！？」

レーザーは重力に耐えきれず、地面に衝突した。

「凄いな、静電気起こしたときより疲れない…このスペカは良作だな」

直ぐに立て直した魔理沙は星形の弾幕を張る。

「残念だな」

が、その弾幕は全て下に落ちる。

「勝ち目薄……………」

魔理沙は箒に乗り、一気に距離を詰めてきた。

「掛かったな？ スペルカード発動、幻符『killer spar
k』！！」

俺は2枚目のスペルカードを発動させた。

そう、効果は言わずもがな咲夜さんの殺人ドールをパクった。

時の流れが限りなく0に近付き、時が止まったような状態にし、時間が止まっている最中に対象へ正電荷を大量に付与する。

これだけだと外傷は皆無だが魔理沙がバラまいた周りの弾幕に負電荷を付与しておく。

「負電荷が正電荷へ向かう事により弾幕から雷が放たれ、さらに弾幕は対象に無限追尾する——。そして時は動き出す！！」

流石に効果が効果だから疲れたな……

パン…パン…パン…

時間を通常に戻したと同時に銃声のような音が3発鳴った。

俺は雷が魔理沙を直接焼かないように服の上で跳電させた。

「うわわっ！？な、なんだ今の！？」

「はい3回被弾ね。俺の勝ちだwww」

「いやあんなの避けられるか！！光の速さじゃないか！！」

「光よりは圧倒的に遅いけどね」

これは弾幕ごっこで圧勝できるスペカだな。

でも弾幕を張るか張られるかしないと使えない制約があるから妖夢とか藍には期待薄だな。

俺は魔理沙と団子屋に戻り、待機していた幼女御一行と人里を練り歩くのだった……。

〵SideChange?〵〵〵

ヤツだ。

またヤツがここ人里にやってきている。

気付かないフリをしているのか気付いているのか判らないが一応こちらに危害を加えるつもりは無いらしい。

だが問題がある。

何故かヤツは、魔女、吸血鬼、妖精、虫の怪を引き連れている。

簡単に手出しできる状態ではない。

「ふん、どれぐらいの力量か、推し量らせてもらおうか」

}} side out }}

く仙人と魔法使いく

愚者の名は蒼隻^{そうせき}。

ある日、愚者は人間であることを棄てた。

食を必要とせず、ただひたすらに存在し続ける存在。

愚者は——人間から仙人へとなり果てた——。

くsidechange蒼隻く

「どうだ翡翠^{ひずい}？」

「周りのヤツらの力が強すぎて見極められないな。だがヤツより周りのヤツらの方が強いだろう……それでもヤツを狙うのか蒼隻……」

「勿論だ。俺は人間であるアイツに興味を持ったんだ。それに力が全てではない。頭がキレルヤツの方が使えるし説得もできるかもしれない」

今日の前で魔力探知をしているのは翡翠。

グリーンの瞳をしていて、スタイルはどちらかと言えば痩せている方。

そしてコレが意外とモテる、言うなれば容姿端麗だ。
あまり力はないが一応魔法使いだ。

「しかし変だな、ヤツから魔力どこるか存在すら感知できない。こんなこと有るはずないのに…」

「存在が感知できない？なんだそれは？」

今現在俺と翡翠は以前人里で見つけ、魔法使いだと名乗った少年を

尾行している。

理由は魔法使いとして、仙人として尾行中の少年が気になるから。そして利用価値があるかの品定めと仲間に引き込む説得。最悪の場合には殺して死体を手に入れる。

本来魔法と言うのは魔力を持った状態で言の葉を並べ、魔力を消費することにより魔法を発現する事が出来る。

中には相当な場数や鍛錬を積み重ね、言の葉無しで魔法を発現させることが出来る者が居ると言われるが、あの少年はそれに当てはまるかどうか判らないが言の葉無しで植物を召喚し、あまつさえ成長までさせた。

サモン（召喚）とグロウアップ（成長）の両方をほぼ同時に言の葉無しでやってのけたのだ。

「プロテクトも掛けている気配は無し。となると能力が一番怪しい線だな」

「探知に掛からない能力か、或いは……」

「最悪、魔法が効かない能力かもな」

「要検証だな」

今回の俺と翡翠の明確な目的は少年を喰らうか味方に付ける。

最終的な目的は人里の人間に対する報復。

今でこそ博麗の巫女により人間の死者数や人間が妖怪を虐げるような事は少なくなったが俺と翡翠は決して人間を許さない。

過去。それはスペルカードルールが出来る前。

俺は妖怪に対抗し、人里の人間を守るために仙人になり、翡翠は魔法使いとなった。

仙人も魔法使いも人間であることを捨て、己の時を止め、幾千もの修行を積み重ね、そしてようやく手に入れた力。

だが待っていたのは人里の人間達からの迫害や虐げ、罵倒だった。

それ以降、俺と翡翠は意気投合し、人里に血の雨を降らせてやろうと長年から策を講じているわけだ。

「やはりあの人間変だ。

この事象が能力なら奴の能力は魔法を掌握する程度の能力でなければ辻褄が合わない」

「なるほどな」

「面倒だから作戦だけ言うが……先ずは俺が騒ぎを起こす。それに周囲の妖精共が気を取られている隙にお前がヤツを誘導し、能力封印の札が貼られた一帯へ誘導し袋叩きにする」

「異論は無いが、そう上手く行くか？」

「俺は蒼隻を信じてるぜ」

そうして俺達は動き出したのだった。

}
}
s
i
d
e

o
u
t
}
}

転生者VS魔法使い&仙人 前編

〃side鬼澤颯〃

団子屋を出た幼女御一行＋俺と魔理沙は適当にフランに人里を案内しながらぶらついていた。

まあ俺も人里の地理は詳しくなかったから魔理沙に案内してもらったわけだが……。

因みに魔理沙は「面白そうだし暇だからつき合ってやるぜ」と言っ
て付いて来た。

「ほれ、ここが寺子屋だ。半獣が講師をしているって言う児童虐待
込みの学びやだ」

「じどうぎゃくたい？」

当然の事ながら言葉の意味が分からないフランは発音もままならず

に聞き返した。

「ああ、児童虐待ってのは――」

「わーわー！！みなまで言うなバカ！！フランに余計な知識与えんな！！！」

児童虐待？ナニソレ楽シソウ的な感じでフランが狂行に走ったらどうするつもりだ！？
下手すりゃ人里消えるぞ！？

「ふむ、仕方ないな。淒く現実的な事を言つと上白沢慧音っていう半獣のババアが生徒に不満を持つとかます頭突きの事で……………」

そんな騒ぎを聞きつけてかちょうど寺子屋から出て来た慧音に気付かず魔理沙は流暢にそんな説明をしていた。

魔理沙、ご冥福をお祈りするぜ。
君の事は多分忘れない。

そして固まる一部の少女。

慧音は憤怒を隠した引きつった笑みで魔理沙の肩をちよいちよいと
つつく。

「——ん？」

振り返り固まる魔理沙。
あ、ザ・ワールド発動したんじゃない？

「誰が——」

「ま、待て——！——誤か——」

「児童虐待のババアだっ!!」

「ひゃうっ!!」

ゴツン!!

そんな擬音が本当に聞こえるんじゃないかと言っぐらいに強烈な一撃だったんじゃないか？

「ふんっ!!一応手加減はしてやった。首の皮が繋がっているだけ有り難く思っんだな」

慧音が滅茶苦茶怖いッス。
いや、黒いな。アレは。

「で、何の用だ？鬼澤殿」

「いや、上白沢嬢に用があつたわけじゃないんだ。寺子屋の前で騒いで悪かつたな」

「嬢！？い、違和感があるから止めてくれ……私の事は慧音でいい」

「んじゃ俺の事は颯で」

「いっつつつ…見たか見たかちびっ子共！これが知識と歴史の半獣の正た——」

「うゝ ああああああ！！！！！！」

魔理沙の言葉を遮るように誰かの悲鳴が聞こえた。

叫び声から男だと推定。

助ける気50%減

「む！？何だ今の悲鳴は！？」

自警団を統率するような人物だからだろうか、慧音は悲鳴の聞こえた方向へ走った。

どうやら俺達の居る通りの一本向こう側で断末魔の叫び声が発せられたようだ。

「空氣的に俺も行くわ。
フラン達はここで大人しく待っていてくれ」

「わかった」

慧音と路地を通過し、件の通りに入る。

するとそこには――

「こと切れてるな。しかし惨い事をする……」

俺達が通りに出ると、まず鼻に刺すような異臭がした。

臭いの正体は歳は30代後半くらいの男性の遺体が燃えている物だった。

「これは…魔法による火だな」

「わかるのか？」

「微かにだが魔力を感じる。それほど大きな物じゃないが…」

「ん？」

遺体の辺りを見回すと視界に赤い光が2つ見えた。

それは路地の陰からこつそりと俺を睨む眼光にしか見えない。

そして付いて来いと言わんばかりにゆっくりと路地の奥へ歩いていった。

「畏かな？ まあいいや。

慧音、遺体の処理任せて良いか？」

「構わないが颯は何処へ？」

「犯人かどうか分からないが容疑者は見つけた」

俺は眼光が消えた路地へ走って行った――

転生者VS魔法使い&仙人 後編

}}side蒼隻}}

「随分あっさり分断できたな……」

先程、翡翠の火焰魔法により人里の人間を一人焼き、路地に仙術で『虚像』を作り出し待機していたわけだが……

「何故ヤツは一人で来た？騒ぎには妖精共も連れてくると思ったが……」

待てよ？てことはあの妖精共の中から誰かを人質にすれば意のままに動かせるんじゃないか？

そんな思いが頭を過ぎったとき、能力封印エリアに虚像が戻ってき

た。

「来たか」

続いて例の少年も姿を現した――

〵〵 side 鬼澤颯〵〵

「お前があの人間を焼いたのか？」

眼光を追って出た場所は空き地だった。

そこには白い着物を羽織った青年が居た。

「正確に言うならば俺は焼いていない。そもそも炎の魔法など使えないからな」

「お前…確かあの工事現場に居た……」

「ああ、覚えていたか。
俺は蒼隻、仙人だ」

仙人って……

この人目がカエルになってないよ！！紛い物だ！！ｗｗｗｗ

「俺は鬼澤颯、外人だ」

「魔法使いじゃなかったか？」

「まあ魔法陣ならいくらでも使えるしあながち間違ってないかな」

「そうか。そんなお前に一つ提案がある」

「？」

「俺ともう一人、翡翠と言う名の魔法使いが居るんだが、我々と組まないか？」

「はあ？いきなりなんだよ？」

「目的はただ一つ。人里の人間共に復讐するためだ」

復讐って…

俺別に人里の人間に恨み無いんだけど……

「復讐って言うけど何の復讐？つか復讐で何すんの？人里を滅亡させたいわけ？」

「順を追って答えよう」

.....。

「成る程な。それであんたら2人は人間を恨むようになったと。だが生憎、俺も人間だぜ？」

「そんな事は知っている。こいつを見る」

そう言って蒼隻は茶褐色の小瓶を取り出す。

「お前ら人間の寿命は短い。だがこの薬、『蓬萊の薬』を飲めば蓬萊人と言う不老不死の存在になれる」

何故にこいつが蓬萊の薬持ってるわけ？

永遠亭から盗んだのか？

「そんなもの必要無いね。確かに常日頃から無敵なのは魅力的だが俺能力でいくらでも寿命延ばせるし」

嘘ではない。時を負に進めれば記憶を持ったまま体の時間を戻せる。

「貴様の能力とは何だ？」

「3つ有るから説明だるいんだけど寿命云々は『正と負を操る程度の能力』だな」

（恐らく交渉は決裂だろう……となれば一撃で仕留める他ないな…）

「まあそんな事はどうでもいいとして、復讐ってやっぱ殺し以外に思いつかないわけ？」

「……………」

「お前らはあくまで助けようとした人間達に努力を踏みにじられ、蔑まれただけだろ？
なのに殺すのか？
それだけの理由で？」

（こいつ……わかったような事を——）

「殺し以外になんか有るんじゃないか？
それにいつの話だよ？
どうせ何十……いや、何百年と時間が経ってるんだろ？だったら復讐の対象なぞ居なくね？」

「それは……………」

「選択肢に……共存って言う言葉は無いのか？
多分、自警団として充分活躍出来ると思うぞ？
何せ人間のために人間を棄てられたんだから」

「俺は……」

「今更だな。小僧、お前が何を言っただとところで無駄だ。
思いつかないわけないだろ？その程度の考えは幾度となく考えたさ。
だがな、その考えを認めると俺達はまた人間に今までの努力を踏みにじられた事になる」

「翡翠……」

（だが……変われるんじゃないか？この人里の味方でも俺達の味方でもないイレギュラーな少年が居れば……）

「これ以上の対話は無駄だ蒼隻。殺るぞ」

「ま、端っからそのつもりでわざわざこんな小細工したんだろうよ」

俺は辺りの民家の所々に貼り付けてある紫色の札に視線をやる。

「ほう、と言うことは既に能力を使おうとしたと？」

「いんや、俺の『能力』で能力が使えなくなるような札だって事を理解出来るんだよ」

「何を言って——」

「悪いがこんなチャチなモンじゃあ俺の能力を封じるなんて無駄だぜ」

そう、どうやらこの札は『生命体に宿る能力を封じる』力を持っているようなんだが。

眼鏡に宿る能力には無干渉な訳で……札も結界を組み込んだだけの物だから効果理解出来ちゃう訳だ。

「最後に問おう、我らに力を貸すか拒否するか……」

「無論、拒否させてもらうぜ」

「そうか。残念だ」

そう言うとき翡翠は指を鳴らした。

家屋の間から明らかに生きていないであろう真っ青な顔色の人間がゾロゾロと出てくる。

そしてソイツらには違わぬ共通点がある。額に札が貼られている。

「リアルにキョンシーかよ……」

札には『死体の絶対服従』と『指令を完遂するまで活動停止しない』の効果が有るようだ。

それだけでなくどこからか死体に魔力供給してやがる。

「死ぬがいい!!」

翡翠は先程人間を焼くのに使った火焰魔法を使ってきた。

といっても火の大玉を一発放ってきただけだ。

「効くかそんなもん」

籠手に触れ、姿を消す火球。

「予想はしていたが……やはり物に宿る能力か…」

「御名答。でもこの札って能力だけが使えなくなるのな」

辺りに居るキョンシーが一斉に飛びかかってきた。

「触んな。あと腐敗臭酷いから防腐剤でも喰つとけ」

飛びかかってきたキョンシー全てを結界に閉じ込め、携帯を開く。

「まだこれ再生してないんだよねえ」

俺は1枚の写真を具現化した。

「食らえ！！パッチェの賢者の石！！」

そう、レミア&パチュリー戦で撮っておいた賢者の石だ。
実はまだ使ってなかったり。

「スペルカード発動。仙符『スモークヴェノム』」

「スペルカード発動！！風魔『デストルネード』」

蒼隻の放ったスペカから大量の白い煙が放出され、翡翠の放ったスペカから高さ5メートル程の竜巻が俺に向かって直進する。

竜巻は周りの白い煙を巻き込み、真っ白な柱のようになりつつ、俺へ突っ込んでくる。

「っ！？この煙…毒か！？」

「もう遅い。俺と蒼隻の同時に発動させた毒煙と竜巻を受けてなお立ちふさがる人間など存在しない」

更に賢者の石おも巻き込み、肥大化する竜巻。

速度は遅いから避けようと思えば避けられる。

だが——これを難なく避けられたとして、待つのは人里の大惨事だ。

毒煙にどの位の殺傷能力があるかは知らない。
だからといって見送る訳にもいかない。

結界はこの辺りを覆える大きさの物を張る時間も無い。

能力は依然として使えず、世界から愛されているのかすら判らない。

「はは……幻想郷に来る段階で予想はしてたが……死ぬの早えよ……俺……」

俺は——息を止め——籠手の分解を最高まで高めて——走っ
た——
.....

スカーレット・デビル 前編

「死んだか」

翡翠と蒼隻の放った竜巻と毒煙は完全に分解されたが、颯は地面にうつ伏せに倒れていた。

「さっさと札を貼って撤退するぞ」

そう言って翡翠はうつ伏せに倒れた颯に近付こうと踏み出したその時。

「スペルカード発動、貫くが意、神槍『スピア・ザ・グングニル』
！」

幼い少女の声が聞こえたかと思うと……翡翠の上半身が——消えた。

代わりには言わんばかりに地面には赤い液体が散乱し、紅いヤリが突き刺さっていた。

「翡翠!?!」

「コイツに気安く触れるな」

「お兄ちゃん!?!」

うつ伏せの颯にフランが駆け寄る。

「早くなさいフラン。
時間が経てば勝手に死ぬわよ。その人間」

「で……でも……」

「昨日あれほど話したでしょう。こうしないと助からないって」

「わ、わかった……」

時が遡ること昨日の夜。

何故か颯が寝てからレミリアに呼び出されたフランは広間へと来ていた。

「大事な話ってなに？ ねえ様」

「明日、あなたの『お兄ちゃん』と人里へ行きなさい」

「え！？ お外に出て良いの！？」

「ええ、もちろんよ。でも人里でちょっとやって欲しいことがある」

の
」

「なに？お外に出れるならフラン何でもするよ？」

「人里で……鬼澤颯は……死ぬわ」

「え？」

「助ける方法は一つしかない。フランが…鬼澤颯を眷族にしなければならぬ」

「え？え！？」

「これはもう決まった未来。決して抗えぬ運命」

「でも…眷族にしたときもしも失敗したら……」

「間違い無く屍人^{グール}に成るわ」

「だったら…そんなの出来ないよ……」

「その点は問題ないわ。」

実はね、あなたの部屋に倒れていたフランと鬼澤颯を見て真っ先に鬼澤颯を喰い殺そうとしたわ」

「えっ？」

「でも、首筋に一噛みした瞬間気付いたわ。あいつの祖先に吸血鬼が居るってね」

「てことはお兄ちゃんも私達と同じ吸血鬼なの？」

「あながち間違っても無いけど違うわ。かなり吸血鬼の血が薄いから普通の人間とあまり変わらないわ。だけど……吸血鬼の血が少しでも混じっていれば屍人にはならない」

「それはわかったけど……ねえ様は良いの？」

「あら？何がかしら？」

「とぼけても知ってるよ？吸血鬼が吸血鬼の血を吸うとその相手を好きになっちゃうんでしょ？」

「……………」

「いくら薄いからって何も感じないってことは無いんじゃないかな……」

「気にすることは無いわ。あなたが眷族にしてみればこの気も消えるから」

……………。

「ちょっと痛いかもしれないけど……ごめんね？」

フランは倒れている颯の首筋に鋭い犬歯を突き立てた――。

スカーレット・デビル 前編（後書き）

この小説での吸血鬼の定理についての補足

興味無い方は飛ばして下さい。

＋弱点

- ・直射日光を浴びているとその部位が焼け崩れる。
- ・鬼と同様に炒った豆を投げつけられるとその部位が焼ける。
- ・吸った血に病原体が有ると稀に感染する。感染すると長期に渡り治らない。

＋非弱点、利点

- ・流れる水を渡ることは可能
- ・ニンニク、十字架、聖書を恐れない
- ・人間とは比べものにならないぐらいの力、治癒速度を持つ。
- ・共通して飛行能力を持つ
- ・自分の血を人間に分け与え、一時的に吸血鬼にする事ができ、そ

の人間を意のままに操れる。

† 眷族、屍人について

・ 眷族とは対象の血を完全に吸い取り、自分の血と混ぜて送り返す事によって契約を結んだ事を指す。

・ 屍人とは、眷族にする際に心身共に吸血鬼を拒絶した際に残る器の事を指す。

・ 屍人は意志を持たない吸血鬼となる。単純に血を求め続ける所謂ゾンビ。

スカーレット・デビル 後編

— なんだ…？

— 体が… 灼けるように熱い…

— 俺… 死んだのか…？

見渡す限り闇、闇、闇。

何もなければ誰も居ない。

今自分が落ちているのか上昇しているのかさえ解らなくなるぐらい
酷い錯覚に捕らわれる。

まるで脳みそをシェイクされている気分だ…

まあそんなことされたら普通の人間なら死んでしまうから物の例え
…だが。

気持ち悪さにイラつきながらこの闇の空間から醒められないことについて考えることにする。

ここは死後の世界？その可能性は限り無く0だ。

こうして意識が有る以上は。

じゃあ肉体に何らかの異常がある？これが一番妥当な線だな。

ここは死ぬ一歩手前に来る場所なのだろうか…？

恐らくそう長くない間に死ぬんだろうけどさ。

しかし、想像していたものは訪れず、代わりにと言わんばかりに紅が走った。

闇の空間は瞬く間に紅に浸食され、まるで紅魔館全体の紅を何十倍にも濃くしたような色の波に飲み込まれた。

今度は紅で目を痛めるのか……と思った矢先、俺は体が引つ張られるような感覚に襲われた後、意識を取り戻した。

目を開けるとそこにはまるで地面に噛みつくように突き刺さった紅いヤリと上半身の無い足が転がっていた。

だが……そんなグロテスクな現状に気が回らないくらい頭が割れるように痛い。

鉄パイプでガンガンと殴られているような感覚を覚えながらも、俺は立ち上がった。

「俺……は……死んだ……のか……?」

「何言ってるの?ちゃんと生きているじゃない」

この声は……レミリアか?

俺はふとあることに気付いた。

背中に何か変な感じがある。

しかも自分の手のように自由に動かせる何かが。

そしてソレに恐る恐る手をやると――

「……翼？」

「そうね。今あなたが触れているのはあなたの翼よ。吸血鬼のね」

「吸…吸血鬼…？」

「そう。あなたはフランの眷族として吸血鬼に成ったのよ。命と引き替えにね」

「俺が……吸血鬼…？」

そこまで言って俺の意識は途絶えた――

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2566v/>

† 正義の崩壊者 †

2011年12月31日05時46分発行